

「造反教師」松元寛の「広大紛争」小説群を 五十年後に読む

中村 平

広島で発行された同人誌『歯車』における、文学者松元寛（一九二四—二〇〇三）の大学闘争・紛争についての小説は、一九六九年一月の「まだ来ない明日」から一九七六年一〇月の「奇妙な幕間」までの七年間にわたる、どれも中短編の九作品の連載である。一九二四年生まれの松元にとり、おおよそ四五歳から五二歳時の作品にあたる。松元は、一九五一年に広島大学の前身の一つである広島高等師範付属高等学校の教諭となつて以来、広島大学皆実分校助手、講師、文学部講師を経て、一九六二年から文学部助教となつていた（教授への昇任は一九八〇年）^①。松元が一当事者として「広大紛争」に巻き込まれ介入し、紛争における自身を見、そして小説の言葉に託そうとしたものに、社会—文学的な読みとして接近していきたい。

松元は「戦中派」を自称し、「左派」ではなかったと言える。しかし「広大紛争」の経過において学内では「造反教師」と目され、全共闘（全学共闘会議）的問題意識にシンパシーを隠さず支持した。松元の位置と思考、苦しみと論理は、大学闘争・紛争における「造反教師」の豊かさを示すだろう。また「闘争か紛争か」は当然に

価値判断と立場性を問うものであるが、これから論じるように、松元はほぼ継続し意識的に「紛争」の語を用いている。本稿では、一部地の文では両者を併記し、松元の文脈では本人が使用した「紛争」を用いる。

松元は大岡昇平を読む中で、その「作品の背骨を支えるもの」（一九九四・一一三）を見ようとす。重なりながらも異なるはずの「大岡を読む」ことと「大岡の作品を読む」こと。拙稿はこの松元に倣い、松元の「大学紛争」作品の「背骨を支えるもの」に肉薄しながら考えていきたい。このことは松元寛とは何者かという問いに繋がるが、J・デリダを読む宮崎裕助（二〇二〇）^②が示唆するように、「松元自身」とは、本稿が捕まえた（言葉にし得た）と思うても、そこからするりと逃れるもの（差延の運動）であろう。松元は、松元の身体と松元の痕跡—エクリチュールの「距たり」によつても成立しているのであれば、エクリチュールの「背骨を支えるもの」と、松元とエクリチュールの間の双方を意識しつつ、上の課題に迫りたい。

一 小説群と「広大紛争」の概観

『歯車』は、松元が中心となり一九五五年七月に創刊され、一九九二年の四一号まで、約三十七年間にわたり続いた広島島の同人誌である。誌名「歯車」の命名の理由について松元は、芥川龍之介の同名の小説からの連想と、現代における人間状況の一面を象徴すると考えたことを挙げている（松元一九六一・三三八・九）^②。本稿を通して論じるように、松元の「広大紛争」小説は、図らずも大学制度における松元自身の「歯車」的状况を語って余りある。

まず、『歯車』に掲載された松元の九編の小説内容を整理しておこう（本小説群は未出版である）。小説の発表順に、①「まだ来ない明日」、②「パラダイス・ロースト」、③「崩壊」、④「授業再開」、⑤「失われた時」、⑥「遠い夜明け」、⑦「戦いの朝」、⑧「名前のない行為」、⑨「奇妙な幕間」と便宜的に数字を振る。

整理分析すると、小説が『歯車』に掲載された期間は一九六九年冬から七六年夏の七年間であり、実際のモデルとなった時期は一九六八年二月から七二年二月の四年間である。広大闘争・紛争がピークを迎える一九六九年八月、松元は「勤めている大学における二月以来のいわゆる大学紛争の中で、身心共に疲労していた」と記しているが（松元一九七三（一九六九）：六一）、これらの小説においても、松元自身をモデルとしたように思われる教員が頻繁に登場し、内容は相当程度、事実に着想を得て描かれたことが推測される。松元を連想させる人物は、①から③における三田、木崎、久倉という助教教授である（④には登場せず）。

①一九六九年冬（一八号）^③「まだ来ない明日」（日市の「二月二一日」、学長会見が大量団交に移行する混乱を描く。モデルは一九六八年二月二〇日の広大学長「カン詰」事件^④。学生多田信吉、英文学史を講義する英文科三田利彦助教教授、学生自治会連合の委員釘本久志、釘本と付き合い恋心を抱く学生石村志津子などの視点）

②一九七〇年夏（二九号）「パラダイス・ロースト」（校舎を占拠する日大大学教養学部闘争委員会の学生要求を受け、公開教授会を開くか否かを教授会で議論。木崎助教教授の学生委員辞任。「六月二十七日、二十九日」。一九六九年六月の広大の状況に対応^⑤。評議員で教養学部教育学講座の坂村教授と、同講座木崎助教教授の視点）

③一九七〇年冬（二〇号）「崩壊」（教授会での議論に失望し、学内向けパンフレットを作成する経緯。「九月末」。右に同じく一九六九年の状況。学生委員を辞した助教教授久倉多加志の視点）^⑥

④一九七一年秋（二二号）冬城浩「授業再開」（機動隊導入と大学ロックアウトの後、授業を再開せんとするある教室における議論の緊迫した応酬。「九月一日」。右に同じく一九六九年の状況。助手江崎早千子と修士課程一年の篠村周一、教室主任の重山教授、四回生狩野良夫の視点）^⑦

④「授業再開」以降、⑨「奇妙な幕間」まで、松元は「冬城浩」の筆名を使用する^⑧。このことの意味は不明だが、「広大紛争」に関する小説の発表が、学内からの批判や噂の対象にされ、それが執筆に影響したことは想像に難くない。④の後、連作の発表には二年間の沈黙がある^⑨。⑤「失われた時」の学長補佐の須崎、そして⑥

「遠い夜明け」以降四編の外村助教教授は、松元自身がモデルになっていると思われる人物である。⑤が一九六九年の紛争後二年半の一九七二年を描くほか、⑥から⑨の描かれた時期は一九六九年二月から四月で、舞台は「K大」とされる。

⑤ 一九七三年冬(二二号)冬城浩「失われた時」(二年半前)の「紛争」の後、「昭和四〇X年」二月一三、一四日。「学費値上げ反対闘争委員会」によつて学長が連行されたことへの学部長会議の緊迫した議論。機動隊導入を決定する。学長補佐委員須田隆司の視点

⑥ 一九七四年秋(二六号)冬城浩「遠い夜明け」(昭和四四年二月一九日午後四時五分)に始まった、評議会との大衆団交とその決裂。

人文科学部「教師」かつ全学・学部の補導委員の外村進司と、学生森村健・稲垣千恵の視点⁽¹⁰⁾

⑦ 一九七五年春(二七号)冬城浩「戦いの朝」(三月三日の入試と当日のデモ開始直前までを描く。人文科学部学生の討議。評議員が学生に拘束されたことへの対処をめぐる人文科学部教授会での議論。全学と学部単位の共闘委員会結成の動き。補導委員である人文科学部英米文学科外村進司助教、人文科学部学生稲垣千恵と森村健らの視点)

⑧ 一九七六年春(二八号)冬城浩「名前のない行為」(四月一日まで。日本における英語教育の目的と歴史についての外村と学生の議論。

人文科学部共闘委員会の団交要求と学部補導委員会、教授会の議論。

人文科学部英米文学科外村助教の視点)

⑨ 一九七六年夏(二九号)冬城浩「奇妙な幕間」(四月二三日の学長選挙まで。理学部長かつ学長代行の大島教授の取り巻きによる選挙

戦略。ハト派の法学部氏家教授が当選。理学部袖崎教授の視点)

この整理からまず分かることは、約七年間というきわめて長い期間にわたり、持ち前の漱石とシエイクスピアの文学研究を進めながら、松元は「広大紛争」ものの連作執筆を手放さなかつたという事実である。後述するように学内向けパンフレットで自説を公開してもいた松元にとり、「紛争」を描くことは大きな意味を持ったのだろうと推測される。ここで九編の小説の内容と、実際の広大闘争・紛争の時期を整理しておく。対応する時期は以下のようになっている。

- ① 一九六八年二月二〇日の広大学長「カン詰」事件⁽¹¹⁾
- ② 一九六九年六月
- ③ 一九六九年九月末
- ④ 一九六九年九月一日
- ⑤ 一九七二年二月の教養部バリケード・ストライキとそれに伴う機動隊導入
- ⑥ 一九六九年二月一九日の大衆団交
- ⑦ 一九六九年三月三日の入試へ
- ⑧ 一九六九年四月一日まで
- ⑨ 一九六九年四月二三日の学長選挙まで

これにより、九編の小説が時系列に沿って描かれたのではなく、行きつ戻りつ書かれたことが明白だろう。時系列に沿って並べれば、①↓⑥から⑨↓②↓④↓③↓⑤」という順になる。このこと

味については明確でないが、後半の⑥から⑨が、機動隊導入に至る一九六九年二月から四月の経緯を時系列的に描き出しており、その前に書かれた②から⑤が、機動隊導入の前後あるいは一九七二年二月の再導入の決定(⑤)を描く。

なお、①の末尾には、執筆終了と思われる「(昭和四三年八月)」という期日が記されている(三三頁)。この日付が誤植でなければ、おそらく一九六八(昭和四三)年二月の学長「カン詰」事件から一九六八年八月の、いずれかの時点において松元は①を書き始めたことになる。しかし残念ながら、九編の小説の上の時間的順序を、松元が意図的に設定して書き始めたか否かは知るべきがない。また、松元は、なぜ⑨「奇妙な幕間」で「紛争」ものを書くのを止めたのか、連作は完結したと考えていたのかについても、現時点では判断を保留とせざるを得ない¹³⁾。

ここで、九編の小説群が「広大紛争」の中でどのような位置にあるのかを、大学側の記述によって補い読者の便としたい。①に関しては、羽田事件で検挙された学生六〇名に対し、日本育英会が奨学金の停廃しようとした事件(一九六八年一月)に端を発する¹⁴⁾。処分を受けた広大生は七名で、うち四名が正門横でハンストに入り、学友会や自治連が抗議集会を継続して開いた。二月二〇日、本部会議室で学長と学生代表の会見が行われ、大学が育英会に出した「統一意見書」などをめぐって議論が紛糾し、午後一一時過ぎ学長が「卒倒」し救急車で運ばれた(『通史』三九五・八頁)。②以降に関しては、『広島大学二十五年度 部局史』(一九七七年)の第一編「文学部」に「学園紛争」の記述があるので以下に引用する。「〔〕」内に、関連する松元の小説番号を付した。

文学部の学生運動は、昭和二〇年代に破防法闘争、三〇年代に安保闘争などがあつたが、それらは概して文学部自治会の一部署有志による活動の範囲をあまり出なかつた。ところが四四年八月をピークとする学園紛争は全学的に熾烈を極め、文学部もその渦中に巻き込まれた。四三年の奨学金打ち切り・学寮管理規程・生協設立などをめぐる学生の動きは、まさにその胎動であつた。四四年に入ると、東大入試中止に伴う水増し入学問題が起り、その年二月、全学共闘委員会は、いわゆる「八項目要求」を掲げて評議会と団交する(⑥)。その解散直後、文学部の一評議員が学生から暴行を受けるという事件が発生した(⑥)。これがある教官が告発したこと(⑦)が契機となり、文学部は全学の紛争の焦点の一つとなつた。三月の文学部入学試験(⑦)は国泰寺高校を借りて実施され、文学部の卒業式は各専攻分散の変則卒業式となつた。四月一〇日、文共闘(院闘連・文闘連・文闘委)は大学改革と告発問題を議題に文学部第二教授会と団交し、午後二時からえんえん夜の一一時に及んだ¹⁵⁾。その夜、文学部は学生の手によって封鎖され、事態の対策を協議する教授会は、八月に至るまで、市内各所を転々とする。六月四日、ようやく行われた吉島公園での入学式はほぼ平穏に終つたが、六月六日の多聞院における文学部新入生ガイダンスは文共闘の妨害で混乱した。五月一五日の学部長および委員会メンバーによる団交をはじめ数次の団交の後、六月二三日、公開教授会の開催を要求する団交が翌朝午前四時まで続いたが、不調のままに以降団交は開かれな

かった(②)。八月一七、一八の両日にわたって機動隊が導入され、四か月余に及んだ封鎖も漸く解除された。九月からは授業は再開された(④)ものの、紛争の余燼は消えやらず、機動隊の常駐もあり、学生による授業妨害もあった。しかし次第に平静をとり戻し、四五年春の新学期ごろからは、授業も正常に行われるようになった。この紛争によつて文学部自治会は自然消滅し、今日まで再建されていない。(三二・三頁)

文学部ではなく教養部が舞台の⑤については、一九七二年二月一日に学長要請により機動隊が導入された(『通史』四七一・四頁)⁽⁵⁾

『広島大学二十五周年史』は大学体制側の歴史記述であり、「不調」「妨害」「混乱」「正常」などの、事実と歴史を一方的に解釈する言葉が登場するが、あくまで事後の大学側からの視点、かつ文学部を対象としたものであることを了解いただければと思う。逆に述べれば、これは広島大学体制側の認識がよく表れた文章であり、松元の小説群は、これを内部から告発し批判するのである。

二 岩崎清一郎による先行研究

松元寛は「戦後の広島文壇を先導」したとも言われるが(榎林二〇一〇:四三四)、管見の限り彼の広大紛争小説については、岩崎清一郎が時間を置いて三度、短く言及している(一九七三、二〇〇〇、二〇一〇)のみで、本格的な分析はされていない。最後の『広島県現代文学事典』(二〇一〇)は簡潔に、「広島大学における紛

争の経緯、収束後における当局側の内情を批判的に捉え、引いては体制批判を誠実に訴えている(九五頁)とする。その通りではあるが、松元がなぜ苦勞して連作を書かねばならなかったのかの根源(作品の背景を支えるもの)に到達するには、幾重の膜がある。

岩崎清一郎『広島の文芸——小説・評論』(一九七三)は、松元の小説群は、「大学紛争」を体験した教師としての苦悩と矛盾、「ラジカルな主張への共鳴と立場の選択の分裂」を描き、周囲を驚かせたとする。「大学紛争をモチーフにした小説は、たとえば山田稔・三浦朱門など少なくないが、松元寛の作品は、理念と行動の分裂した立場におかれた苦悩を客体化しようとしており、自虐への傾きもない代りに戯画化の意志も持ちこめないところに古風な抒情がひそみ、記録と虚構の問題に徹しきれない甘さを指摘するむきもあった」(二五九・六〇頁)としている。岩崎の本論評は、一九七八年まで続いた連載の途中に出されたものであることに注意したいが、「記録と虚構」のどつちつかずという批判は、後節でも見るように一定程度肯定される。

その後二十七年を経て、岩崎は「広島文学——ゆかりのある作家たち(六)(戦後篇)」(二〇〇〇)で、もう少し多く触れた⁽⁶⁾。松元は「大学紛争の渦中にもまれ、造反教師」と目されて発言を封じられる、というハムレット的苦悩にまどわれて、瘦身をさらに削った⁽⁷⁾。渦中にあつた「辛苦な体験」を一連の「学園紛争」小説に仕立て、「キマジメ至極」の憂い顔を俯けた自画像と現場記録と体制批判を書きつけ「一矢を報いた」(同上:四八七)。「崩壊」「授業再開」「失われた時」の三編は紛争収拾までの経緯を、「遠い夜明け」「戦いの朝」「奇妙な幕間」の三編では、紛争収束後の学園

改革委員会の内情を扱う。「学園紛争」は、学生と対峙する立場にあつた教官として激甚の体験であつた(同上・四八九)。

「崩壊」は、一九六九年八月一七日の落城以前における学内の拮抗で孤立をふかめる久倉を主人公に教授会と学生側の調停を成しえなかつた悔いと無力感を記録したものである。一連の作品をインサイドレポートと読むこともできる。これら四〇〇枚余に達する六つの小説は、「崩壊」を除いて『冬城浩』の筆名で発表、虚構である旨の断り書きを付記しているが、事実的な経過の記述にはほぼ忠実であり、学生代表と交渉する立場に立たされた久倉がおのれの論理的な言動と対応に教授たちの支持が得られず、「こうもり」にも劣る無力に終始せざるを得なかつた経緯と内奥の苦痛がごく控え目に語られ、学生たちの意外な無理解と教授たちの保身と卑劣が暴かれながらも、攻撃的な糾弾の声に昂ぶることはない。思いはたぐり込まれて抗議の叫びにはならないのである。誇張がない代りに熱気を帯びない所以かもしれない。封鎖解除後には、改革委員会が設けられ、学生側の言い分を受け入れようとするが、結局、なし崩しに旧態に戻つてしまつたかのようである。(中略) 学園紛争が産み落としたものほなにか、『冬城浩』が書き残したレポートを基に、今度は松元寛が小説のかたちで伝えることである。(同上・四九〇・一)

岩崎の説明は主人公久倉の葛藤をめぐる紹介にとどまり、「レポート」から「小説」が未来に書かれるだろうという、松元にす

ればおそらく見当はずれの予測も記される。九編ある小説群は、六編までしか目にされていらない。もし松元の小説群が「レポート」であるなら、何がそれを小説と分けるのかの説明が必要であり、それは自ずと岩崎の小説観自体への問題につながるだろう。批評には、松元が苦心して直面した問題に、岩崎がどう向かい合うのかという真摯な対話が必要であり、それには時間と紙幅を費やした作業が不可欠である。

三 学内向けパンフレットでの松元の主張

次に、これらの小説群を執筆するにあたり、当時文学部助教授であつた松元が、「広大紛争」をどのように考えていたかが分かる文章を検討しておきたい。それは、一九六九年八月三〇日の日付が記された、「われわれにとつての真の問題は何なのか——一教官の立場から」というパンフレットであり、広島大学文学部内外に配布されたものである。⁸⁾ 本パンフは広大『学内通信』九月二六日号にも掲載され、後に『象牙とチョーク』(一九七八年)に所収された。

広島大学の全構成員、特に教官の方々に、今われわれのおかれている事態を「万やむをえなかつた」として肯定するのではなく、この事態を支えるあらゆる虚偽、虚飾を否定し去つて、現在の大学の現状を直視し、その直視の中から未来の大学のあり方を模索する努力をすることを提案する。(松元一九七八

一九六九年八月三〇日にあつて「今われわれのおかれている事態」とは、全学共闘会議による一九六九年二月からの一部キャンパスの封鎖に対し、八月一日に大学が警察力を導入し、機動隊の駐留の下で九月一日に授業が再開されようとする事態を指す⁽⁴⁾。この間の大学側の処置に対し松元は「承服することができず」、その理由をパンフレットの形で発行し、所属する文学部「教官」および学内有志に配布した。

事態が起る直前において万やむをえなかつたかどうかを事後において考えることをやめる時、われわれは事態の進行に受動的に流される以外になくなるのではないか。そのようにしてわれわれは、今から三十数年前、「やむをえない」戦争の中にひきずりこまれたのであった。(同上 一一九頁)

松元にとつて、大学「紛争」(二一八頁)への暴力的解決と、三〇数年前の戦争突入を、事後において思考し続けることは同質のものなのだ。以下、機動隊導入とそれによる授業再開を「やむをえない」こととしない、松元の論理を見ていく。

一九六九年四月、三好稔学長代行(二月一八日から五月六日在任)は、全共闘の要求が「広島帝国主義大学」の体制そのものを許さない非妥協的闘いに転換した」と認識し、全共闘側が話し合いの相手にならないと判断していた。その後五月七日、医学部教授の飯島宗一が学長となり三好路線を批判し、ねばり強い話し合いと「団交」の活発化によつて解決を求め続けた、という経緯が松元の整理である。

広大全共闘主流に中核派があり、そこで革命政治路線が考えられていたことは既に早くからわかっていたことであつた。(中略)にもかかわらず、飯島学長が話し合い路線でそれに対応しようとしたのは、彼らの主張のうちに含まれている正当な問題提起を認めた上で、話し合いによつて彼らの性急な革命方式に、いわば減速措置をほどこし、そのエネルギーを吸収することによつて本格的な大学改革を実行しようという意図だったのである。その意味で八月中旬の学長判断「機動隊導入」は、むしろ自らの話し合い路線が所期の目的を達せず、中途で破綻・挫折したことを意味するのみであつて、直接に全共闘運動の不当性を証するものではありえなかつた。／そのことを全くふせて、全共闘学生諸君にすべての責任をおしつけ、機動隊による力の排除を「やむをえない」という口実のもとに正当化することは、欺瞞的というより外に言いようのないものであつた。(同上 二二一・二二頁、〔〕内は中村による補足)

ここで松元は全共闘側に立ち、はっきりと飯島学長路線を批判している。

学生諸君が封鎖に固執したから対話がとぎれたのではなく、対話がとぎれたから彼らは封鎖に固執したのであり、その退廃、或いは政治化も起つたのである。(同上 二二三頁)

松元は、学生側を退廃と政治化に追い込んだのは、大学執行部

の側ではないかとしている。またその批判は、自らの所属する文学部教授会にも向けられる。「欺瞞」は、大学執行部のみならず、文学部教授会にもあったと松元は言う。六月二三日の文学部団交において公開教授会を約束した「教官団」は、二五日の非公開教授会においてその前言を翻す決定をした。松元はそれを、「教官」側の「退廃」がますます明らかになった事態だと表現している（同上 一二三・四頁）。

学問や思想の自由が取り払われ、一年刻みに進んでいく入学、進級、卒業そして「非常措置法」のタイムリミットという根柢だけにより営まれる「大学」。そうした大学には「学問・思想の自由」も「大学の自治」も不用なのである。我々は無条件にその力に屈するか否かを、今問われている。（同上 一二五・六頁）

ここに言う「非常措置法」とは「大学の運営に関する臨時措置法」を指す。その第七条の二は、「紛争大学の学部等において大学紛争が生じた後九月以上を経過した場合」などに、文部大臣が臨時大学問題審議会の議に基づき、当該学部等の教育研究機能を停止することができる」と規定したものだ。一九六九年八月七日に本法が施行され、広大への機動隊導入はその一〇日後の一七日に行われた。松元は、日本政府（当時は自民党佐藤榮作内閣）の強行立法と、その背景にある、近代日本において制度化された大学教育の形骸化を、明白に批判していたのである²⁰⁾。

このパンフレットの存在について、松元は小説に書き込んでいる。

③「崩壊」には、久倉助教授が教授会に自らの考えを提案として提出するも、一蹴され、全学の人々に聞いてもらおう印刷物を公表したいという一節がある。その後、久倉は同じ講座の主任である橋本教授に呼び出され、「君はもう少し沈黙することを学びたまえ」と、文章を発表することへの圧力を受ける。「絶望的な暗い気持ち」になりながら、しかし久倉は「六頁のタイプ印刷のパンフレット」を作って配布した。ただそのパンフレットに報いられたものは、再びの「沈黙」であった（一三六・八頁）。③は一九六九年九月末時点とそこでの回想を扱っているので、現実の松元のパンフ配布の行為と、時期的にも符合する。

松元パンフに対しては、前学生部長の浅川淑彦が『学内通信』で反論を発表し、松元は同通信で再度自論を展開し、議論になっている²¹⁾。河西英通はこれらの応酬に「対話・対論が成立している」と指摘する（河西二〇〇九：五七）。以下簡単に情報をまとめておく。

【広島大学『学内通信』関連情報】

一九六九年九月二六日、一六号、松元寛「われわれにとつて真の問題は何なのか——教官の立場から」、三一七頁²²⁾

一九六九年二月五日、二二号、浅川淑彦「実存と仮象」、四・七頁

一九七〇年一月二〇日、二四号、松元寛「浅川氏の反論を読んで」、一〇・一一頁

松元と浅川の議論を簡単に振り返っておく。浅川の「実存と仮

象」は、松元論文が「実践的提案としていかに観念的抽象であり」「いかに非実存的発言」であるかと言い、学長は「なすべき努力をなすべくして機動隊の導入となつた」と言い切る。浅川は自らを実存家に、松元の主張をセンチメンタルな精神主義の仮象に模し、自らは決断し、現実に関つてゐることを強調する（四・六頁）。この文章だけを読めば勢いはよいが、「ひよわな若ものたちに封鎖され」という文言（七頁）に見られるように、果たして浅川自身が、松元が直面し応答しようとした学生の声にどこまで向き合つてゐるか疑問とせざるを得ない。この文章には、自らは自信を持つて事にあたつてきたのであるから何にも恥じないという、勢い突つ張り突き放しを感じる。²³⁾

松元の「浅川氏の反論を読んで」は、浅川の文章には「ひとの文章を無理にねじまげて他に誤解を強ひようとする或る強引さ」があるとして、さらに「自らの責任を棚上げして、現状に不都合なものにすべての責任を押しつけて自らは高しとする責任回避」を浅川と学内の体質として挙げる。そして問題は、「私達教師一人一人」の、それまで自らやってきたことに対してどのように責任を負うのかという問題であり、その意味での「精神主義」の地底に立つことを確認してゐる（二〇・二二頁）。

四 敗戦の廃墟を想起する松元と自由の時空間

松元をして「広大紛争」を書かした一つの原因に、自己も関わつたアジア・太平洋戦争の敗戦を思想的に受け止めきれなかつた自分と日本社会への、根源的な反省あるいは引きずりするようなもの

がある。松元は一九四五年当時、約二一歳であり、陸軍輜重兵学校在学中、福島に疎開してゐて敗戦を迎えた。①「まだ来ない明日」にその心境がづつられている。

① 団交と敗戦の廃墟の重ね合わせ

「まだ来ない明日」は、「昨年の羽田事件」で逮捕・起訴された学生への育英会奨学金停止処分への抗議と協議のプロセスが描かれる。自治会連合が学長会見を勝ちとり、それが大衆団交へ移行、数時間にわたる話し合いは混乱し、学長は「頭をかかえてうつぶせてしま」う（七、二八頁）。²⁴⁾ 救急車が到着し、学生と「教官」がもみ合う中、学長は担架に乗せられ運ばれていく。これは、一九六八年二月二〇日のいわゆる広大学長「カン詰」事件に素材を取つたものである（『通史』三九六頁）。その混乱の中で、助教三田の心中が長く吐露される。喧騒に満ちた廊下の押し合いにあつて、人間たちが人それぞれに異なつた思惑を抱いて、しかし「運動だけは一点に集中している」ように見える。これと同じ経験を味わつたことがあると三田は言う（三〇頁）。

何も彼もから解き放たれて、しかし何も支えてくれるものない空間に投げ出されたような感じ（中略）それは、戦争がすんで、軍隊の営門を出て、自分の家に向かつた時のあの感じた。

まだアメリカ軍は一部にしか進駐していなかつたが、途中汽車に乗つて帰らなければならなかつた三田は、もしどこかの駅でアメリカ軍の兵士と出会つた時、どうしてよいのかわからな

つた。武器こそ持っていなかったが、軍服のまま、支給された食糧などの梱包をかついだ彼の姿は、やはり日本軍の一兵士であった。その彼が菅門を出て、何の身を守るものもなしに、しかも治安状態もどうなっているか解らぬ戦争直後の社会を、遠いわが家まで果たして帰りつけるものかどうか。(三〇・一頁)

このように、三田―松元は団交の混乱の最中に、敗戦の浮遊感を想起する。実は同日の英文学史のクラスで、三田は「第一次大戦後のイギリスの状況」(三一頁)について語っていた。第一次大戦後、D・H・ローレンスは『チャタレー夫人の恋人』(一九二八年)で、「大洪水」後の「廃墟」の中にいるという「悲劇的な時代」状況について語っている。同日の団交の混乱の中、日本の敗戦の混乱が想起されるが、その伏線は松元の小説の冒頭で、「新しい小さな希望」(一二、一三頁に二回登場する言葉)と共に張られていた。

しかし彼はその時、自由であった。彼は今や、一切の束縛から解き放たれて、何でも好きなことができるはずだった。しかも、彼は何もできなかった。何をする力もない自分をも感じないではいられなかった。(中略)あの時と今とは、形こそ違え、同じ状況であるように彼には思われた。人波に押されて、しかし前へ進むこともならず身をもがきながら、三田は、学生たちの胸の中にも、いやそこには三田自身よりもっと強烈に、この解放と不安のないまぜになつた感情が渦巻いているのではないかと思つた。(三一頁)

ここでは、敗戦と「廣大紛争」の最中という別々の出来事が、「解放と不安」の混淆として、時空を超え一気に重ねられる。しかもそれは「自由」でもあるというのである。

学生達にとって、この大学の、そして日本の社会の機構は、今では全くの虚偽であり、眼に鉄筋コンクリートの建物や、いかめしい学長室が見えていても、それは荒廃した残骸の如きものに過ぎなくなっているのではないか。学生の人間としての存在を圧殺して、この巨大な虚無の機構の中にはめこもうとしている現代社会は、学生たちにとって爆弾や砲弾に痛めつけられた廃墟としか見えないのではないか。廃墟なら廃墟らしく、虚偽の一切を破壊し尽して、本物の廃墟から一切をやりなおした方がいい。まず本物の廃墟を実現することが、出発への第一歩だ。学生達はそう考えているのではないか。(三一頁)

松元が「廣大紛争」に見ているものが、大学教育制度の「廃墟」であり、それを糊塗する「虚偽」であることが分かる(この「廃墟」論については後節でも論じる)。各セクトなど様々に立場は異なれ、学生たちはそれを見抜いたからこそ、継続した運動力を持続し得たのだ。

そうだ、これをくぐり抜けなければ何事も始まりはしないのだ、日本は、戦争に負けた時、本当にこの一切が無に帰した廃墟を通り抜けることをしなかつたんだ。通り抜ける風をして、その傍を通り過ぎてしまった。だから今もう一度、思いを新た

にしてこれを通り抜けなければならない。(三二頁)

「大学紛争」ものに、期せずして、先の戦争に対して責任を取り切ろうとしない戦後日本社会という認識が登場する。本小説は、日本社会の敗戦の受け止めについてとパラレルに、大学教育制度の崩壊と墮落をそのものとして見つめることを訴え、そこからの新生や再建を訴えている。九編の小説群を貫くもの、あるいは松元の執筆の持続を支えたものは、この軸にあると見てよいだろう。それは、松元が自らの身体感覚を直視し、言葉として対象化し得たことに由来する。敗戦後と団交時の浮遊感のある時空間は、不安とともに解放感と自由で満ちたものであった。⁵⁵ 第二節で見たように、松元は、「あらゆる虚偽、虚飾を否定し去って、現在の大学の現状を直視し、その直視の中から未来の大学のあり方を模索する努力をすること」と学内向けパンフで主張していた。松元は、そこを軸に、そこを起点として、社会と大学制度を構築し直そうと呼びかけていたのであり、小説題名の「まだ来ない明日」は、そこに付けられた名前なのである。

「廃墟なら廃墟らしく、廃墟の一切を破壊しつくして、本物の廃墟から一切をやり直したほうがいい。まず本物の廃墟を実現することが、出発の第一歩だ」という部分に関し、本草稿を読んだ高雄きくえ氏は、同時期になされていた松元の原爆ドーム保存批判に関連させてこう述べている。

「原爆ドームという廃墟」と「大学の廃墟」、「糊塗する薬剤」と「機動隊導入という暴力」、「被爆体験の風化」と「闘争体

験の風化」は松元において重なっており、松元は広島の平和と広島大学での教育という「場」の「廃墟」を同時に生きていた。(二〇二〇年五月私信、中村が整理した)

同時期になされた松元の原爆ドーム保存への批判とは、福間良明(二〇一六)が論じる松元のエッセイ「被爆体験の風化」(中国新聞一九七〇年八月三日)に見られるものである。広大紛争ものを連作していた一九七〇年という時期に、松元は、ドームの倒壊を押しとどめる「保存」によって、「忘却や風化が進行していることそのもの」が不可視化されてしまうと批判していた(福間二〇一六)⁵⁶。「廃墟なら廃墟らしく、本物の廃墟から一切をやり直したほうがいい。まず本物の廃墟を実現すること」という、松元の「大学紛争」に対する言葉が、広島の平和運動批判とびたりと重なっていることが分かるだろう。

② 大学の廃墟とその糊塗

ここで、松元は学生運動に直面する大学教員・大学制度における虚飾と虚偽をどう描いていたかについて、展開しておきたい。廃墟がいかに糊塗されたかという問題である。

⑥では、人文科学部教職員学生合同集会の後に開かれることになつてた教授会について触れられるが、合同集会が紛糾して解散になったため、学生が「学部長を拉致」することを恐れ、教授たちは会議室ではなく、その向かい側の事務室に隠れるようにして集まっていた。外村助教教授は補導委員として学生に対処しており遅れ

てそこに入ったのだが、その光景から「裏切られたような腹立たしさ」、「怒りと失望」を感じる。外村は「なんでこんな逃げかくれるような真似」をするのか、こういう態度を取るから学生は「教官」を信用しなくなると考え、「学部教授たちの無残な姿」に憤る。学生達に外村はこう語る。

「大学が現在まで蓄積し、隠してきた古臭いものが、これまでは何とかポロを出さないですんできたけれども、それが今度のことです。だんだん曝露され始めているんだ。一度徹底的に曝露されなければならぬものだったのかもしれない」（四三頁）

評議員との団交で、学生の森村は評議員たちの姿をこう語る。

或る評議員は額に汗を浮べてマイクを手にしたまま、茫然と立ち尽くしていた。或る評議員は立ち上がると、昂然とした面持ちで「評議員会は公開した前例がないので……」と言いかけたまま、学生の激しい怒号に曝されて、マイクを持つ手は遠くからもはつきり見えるようにふるわせながら、崩れるように腰をおろした。また別の評議員は「諸君は学生として、勉強にいそむことが第一の義務であって、こんな深夜に至るまで、このようなところで時間をつぶしたりしてはいけません」というようなことを言い出して、激しい野次を浴びた。（中略）「私は何も言うことはない。学長代行の判断にすべてまかせる。学長代行がいけないと言われるのなら、いけないのだろう」と言つて坐る評議員もいた。「お前は、自分の研究結果についても、

学長代行に判断をまかせるのか」という野次が飛んだ。／そのひとりひとりの答え方は様々でありながら、その底に共通する何か冷えびえとしたものを、森村は、いったい何だろうと考えていた。（四四・四五頁）

「何か冷えびえとしたもの」の中身とはおそらく、松元も言うように、慣習化し肥大化し形式化してきた大学制度の中で、責任ある立場にある教員たちがその責任を明確に言葉にできない姿であり、そうした廃墟を糊塗しようとする欺瞞なのだろう。

次に②では、公開教授会を避けたいとする教員たちの欺瞞的な姿が描かれる。学生との団交の席上で、教養学部の出席三五名の「教官」中三四名が、条件付きを含め一旦は教授会を学生に公開することに賛成した。しかし学部長だけが最後まで反対したため、再度本件について教授会が開かれた。この教授会の中では、団交の場では学生のプレッシャーにより落ち着いてモノが話せるような状態でないと言明する者、団交は「一種の物理的暴力の場」と述べる者が登場する。これらは学生の前では決して登場しない言葉である。また教授会の場では、何か言うことで責任を取らされては困るというような姿——「石のように無表情に坐っている教授達の非人間的な気味の悪さ」（八九頁）も指摘される。教授会の非公開は教養学部の慣行であって、その変更には評議員会の承認を得るべきだということづけのような議論により、教授会公開の決定を先延ばししようとする者。結局、公開非公開について、学部長に一任するという動議が過半数の承認を得て通つてしまふ⁽⁷⁾。木崎助教教授はここに「教養学部教授会の頹廃部分」を指摘する。

教授会公開は学部長がするのではない、教授会構成員の一人一人が、するかしらないかに責任を持って決断することで決定すべき問題である。(中略) それなのに、学部長一任のばあい、学部長が下す結論が解っていないながら、それをあたかも白紙状態であるかのように擬態して、それに自らの責任をあげようとするような決定を、よもや教養学部教授会がしようとは、木崎は思いもせめなかつた。(九四頁)

木崎はその直後、学生委員を辞任すること、学部長と学部の評議員、教養学部教授会への不信任を宣言し、現実的かつ精神世界を「墜落」してゆく。「付記」には、「広島大学において、昨年これと似た事件が起つた」と記される。現実在一九六九年六月、松元は学生委員を辞した。⁽²⁵⁾

以上のほか、④では大学の方針に背反しないよう、冷や汗をかきながら「授業再開」の論理を学生に語る教室主任重山教授の姿が描かれるなど、松元の小説群は、大学の頹廢とそれを糊塗し制度を継続しよう、「正常化」しようとする大学人と制度を詳細に描いている。⁽²⁶⁾

五 ポジショナリティとしての「紛争」「教師／教官」の語の使用

本節では、松元が意図して使い分けたとと思われる、「紛争」「教師／教官」の語について分析を加えたい。松元は後年、一九九四年に上梓した『小説家 大岡昇平——敗戦という十字架を背負つて』

の中で、大岡がメートル法と尺貫法を明確に使い分けて『俘虜記』を書いていた事実に着目し、それは加藤典洋の『ゆるやかな速度』(一九九〇年)でも評価された。⁽²⁶⁾メートル法と尺貫法が、世界の事実を切り取る仮構されたモノサシ方法論であり、その方法論＝言語を用いて現実を実際に生きる者たちを描く際、作家はそのことに細心の注意を払うだろう。

①「まだ来ない明日」を例にとると、教員(これは私の用語法である)を指す言葉は複数使われている。学生多田信吉の心情や主観においては、「三田助教授」であるが、団交場面で対峙した教員は「教官」「教授達」と呼ばれている。一方、三田が自己の心情を語る際自分に対しては「教師」を用い、大学から三田への電話では「教官」が使われる。緊迫した団交場面では、「今のこの学生と教官の間でもまれている自分」(三一頁)が捉えられる。いわば、公的な場面においては「教官」が使われ、自らを語る際には自己を「教師」と呼んでいる。

松元は自身を一貫して「教師」と捉えていた。一九七八年に上梓した『象牙とチョーク——体験的英語教師論』や、晩年の一九九九年から翌年にかけて『英語青年』で連載した「はぐれ英語教師——戦中派」(二〇二二)でも、「教師」が用いられている。しかし松元は、自分の規定が「教師」であっても、権威主義的でもある厳とした国立大学の教育体制にあって、自分のポジショニングが「教官」の位置から逃れきれないことも、同時に自覚していた。

第二節で検討したパンフレット「われわれにとつての真の問題は何か」は、サブタイトルに「教官の立場」がわざわざ付されている。先に引用したように、このパンフは「広島大学の全構成員、特

に教官の方々に「提案するものと述べられる。これは、限られた字数で最大限のインパクトを求めんとするパンフレットにおいて、松元の自己規定する「教師」を用いることはその説明を必要とするし、「教官と学生」の対立構造が深まっていく中で、その位置を積極的に関与して行こうとする松元の姿勢の表れと考えられる。

「教官」と「教師」のこの使い分けは、②から⑧の小説群においても一貫している。松元は「教官／学生」のポジショナリティに敏感であった⁽³⁾。③「崩壊」においては、松元を思わせる久倉助教教授が、こう思考する場面がある。「おれは教授会では、学生の味方、というよりも扇動者としてしか見られていない。(中略)しかしおれは、学生達の前に出た時に、いつも大学側の教官の一人でしかありえなかった」(二四一頁)。そして自らを、「鳥」にも「けもの」にもなれない「こうもり」ではないのではないかと呻吟する(一四二頁)。こうした久倉―松元の内面的葛藤を経て、それ以降から晩年の「教師」「大学紛争」という語を選択していくという収斂は、なされていったのである。

「紛争」の語が連作小説で登場するのは、一九六九年八月一七日の機動隊導入後に建物の封鎖が解除され、「授業再開」がテーマになっている④においてである。ある「教室」の主任教授重山は、学生に対し授業再開の姿勢を示すべく話した内容に、「紛争」を使っている(二〇六、一一〇頁)。これは大学執行部側に立とうとする重山教授の姿勢に符合する。同じ教室の助手江崎早千子も、括弧付きで「紛争」を使用する(一一四頁)。江崎は教員について「教官」としており(一〇四頁)、助手という微妙な立場にあつて、「教官／学生」の引き裂かれにすぐにはつきりした立場を表明しているわけ

ではない。一方、松元を思わせる主人公が「闘争」の語を使った形跡も見当たらない。⑨では、学生木島が「闘争」の語を使っている(二〇頁)。

④において学部四回生の狩野は、重山教授が沖繩出身の同級生「樋沼健治」に「沖繩では日本語を使っているんですか」と無知な質問をし、樋沼を傷つけたことを語る。そして重山教授に向けてこう展開する。

「樋沼君は、今ぼく達の手の届かない所まで運動に深入りしてしまった。そこまで樋沼君を追いこんだのはあんたなのだ。国家公務員であるということは、こうやって学生の一人がその一生の方向を取り返しのつかぬまでに狂わせてしまうかも知判らない所に追い込まれていることに対して、何の良心の痛みも感じないでいられることなんだ。学生の一人がどうなるうと、授業が時間割通り行われていれば責任を果たしていると思つて安心している精神——それが、学問を研究し学生を教育する大学の教師の精神だと言つてよいだろうか。ぼく達はそういう教官達に問題を投げかけ、一緒に考えてもらおうとしていた(中略)国家公務員に過ぎない教師なんか、教師じゃない、そんな奴は——」(二一九、二〇頁、強調は中村)。

一九六九年当時「教官」とは、もちろん国立大学における国家公務員であつたが、国家が規定する「教官」と、学生に教育者としての責を負う「教師」が、ここに明確に区別されている。これは学生の発言であるが、これまで論じてきたように、「紛争」の過程

で松元が突き付けられ、練り上げていった考え方と用語であろう。

松元の使用する「教師」は、おそらく、当時全国で使われた「造反教師」とも重なっている。一九六九年六月には、『朝日ジャーナル』でも「造反教師」についての特集が組まれ、折原浩『大学の頽廃の淵にて——東大闘争における一教師の歩み』という「教師」を使用した本も出版されていた⁽³²⁾。「学生たちの、多くのばあい、こなれていない、性急な、観念的な要求を、実りあるものにするのが教師の仕事である」という朝日ジャーナル編集部の言葉（編集部一九六九・五）は、松元の姿勢にびたりと当てはまる。

⑥「遠い夜明け」においては、「管理者としての教官、被管理者としての学生」（三五頁）という「立場」の問題がクローズアップされる。以下は、人文科学部の集会における、富田譲二という「反日共系のCH派」（三九頁）の学部生の発言である⁽³³⁾。

「教官はわれわれ学生と同じ席にどうして坐っているんだ？
教官はわれわれと同じ立場に立っていない。教官はわれわれを管理する立場にあり、われわれ学生は教官に管理される立場におかれている。それが教官と学生の関係ではないか。管理者と被管理者とが同じ席に坐って仲よくやりましょう、などというのは、茶番以外の何ものでもない」（四一頁）

松元の小説は、ポジシヨナリテイに関するこうした一部学生の厳しい批判を明確に聞き取り、記述の対象としているのである。この意味で、松元は学生から突き付けられたものに誠実に向き合おうとし、それを書くことで、「教官」であり同時に「教師」であるこ

との責任を果たそうと努力する。

松元は、一九九九年の『英語青年』の連載で、広島大学の「大学紛争」をほぼ三〇年後に振り返っている⁽³⁴⁾。この連載で松元は、一貫して「大学紛争」の語を使用している。

私は最初学生委員として学生と大学側の間を往来して、学生の要求を聞きそれを話し合う「団交」を設定する交渉に追われていましたが、文部省が「大学の運営に関する臨時措置法」を定めて、全国に拡がった大学紛争を警察力で收拾する方針を決めて以降、広島大学も「団交」を受け付けず警察力導入の機を待つ方針をとるようになり、私はそれに抗議して、警察力が入るしばらく前に学生委員を辞任していました。（中略）それにしても、大学を、権威主義的な講座制や単位制度で学生を「管理」する場ではなく、学問を通じた人間解放の場にしてほしいという一般学生の希望までもつぶしてはならないと思つて、私は「正常化」した大学の中で、なお学生たちの希望を実現する道を模索していました。私は、学生に同情的だったというので教授会で「造反教師」として冷たい目で見られるのを我慢しながら、僅かに残った同じ考えの仲間と、自主講座や研究会を計画し、大学側が再開した授業も始めていました。（松元 一九九九年d：二六）

松元は、自らの職責やベルソナを「教師」として捉えつつも、学生の闘争に直面し、自らの「教官」の立場から離られないことを自覚していた。そのことが、「闘争」の語ではなく、「紛争」を使わ

せる主たる要因であったと考えられる。同時期に九州大学教授だった哲学者滝沢克己（一九〇九—一九八四）は一九七〇年に大学を辞し、著作物では「闘争」を表明していた（滝沢 一九七二）。一方で松元は「造反教師」と目されながらも、安易に学生の立場に同一化することなく（それは欺瞞となろう）、自己の使う言葉に正確さを求める姿勢が存在していた。連作群における「教師」「教官」の使い分けは、場面と文脈によって立場性がどう意味づけられているのかを、その都度適切に表現する言葉であった。松元の「大学紛争」小説がリアルさを持つのは、そうしたポジショナリテイの細部への丁寧なこだわりにも拠るものである。

六 戦争と植民地、ジェンダーをめぐる

松元の小説群が描かなかつたもの一つに、バリケードの中の状況がある。また、全共闘運動で言われた「自己否定」についても、触れていない⁽³⁵⁾。これに関わり、全共闘運動の男性の言う「自己否定」のなかには、「男という自己」は入っていないかつたという指摘がある（女たちの現在を問う会編一九九六・六）。このように松元が描かなかつた・描けなかつたものはあるが、本節では植民地とジェンダーの問題について触れておく。

① 植民地朝鮮とポストコロニアルの視点から

松元は一九二四年、日本植民地朝鮮の「京城」生まれである。しかし松元には、生まれ七歳くらいまで住んだ「京城」と朝鮮につ

いて、ほとんどと言ってよいくらい記述をものにしていないという不可思議さがある。

松元の父は会社員で、父の京城赴任中に松元は生まれた（松元 一九七三）。一九三一年に東京で小学校に入学した。七歳ほどを京城で暮らしたので、幼少時の記憶は持っていたはずである。その後、小学二年時に広島の袋町尋常高等小学校に転入学、一九三七年、広島高等師範学校付属中学校に入学し（一九七三・一四・三二）、一九四一年に東京の第一高等学校、一九四三年に東京帝国大学文学部に進学する。一九四四年から兵役に就き、広島の歩兵第一連隊に入営後、東京の陸軍輜重兵学校に移り、福島疎開中に敗戦を迎えた。出張中の父は原爆を逃れたが、広島市内に住んでいた母を亡くす（一九七三・四四・五）。

松元には、「八・六、広島の意味するもの」という文章がある（一九九五（一九七三））。これは一九七一年に広島女学院大学で行った「原爆講座」での内容を基にしたものであるが、ここで、「日本人全体として」戦争においては「充分に加害者としての資格を持っていた」という表明がある（一九九五・五七）。しかしその「加害」の指すものは、あくまでも狭義のアジア・太平洋戦争での日本軍の残虐行為であって、植民地支配や朝鮮については言及されていない。松元にとり敗戦の衝撃は、植民地における幼年の自己形成の経験をはるかに上回るものだったのだ。

当時国の置かれている状況を客観的に知る術を持たぬままに、国の言うことを丸ごと信ずることもできず、かといって頭から否定することもできなかった私にとつて、軍隊生活は、果てし

ない監禁状態、それが終るのは死ぬ時だとしか思いようのない日々でした。戦後しばらくの間、それは全くの断絶で、その後、にそれまでとは全く別の人生が始まったように感じられていました。(松元 一九九 a : 七)

続けて松元は、「古い価値観の崩壊など、確かに断絶」があったと言っている。「典型的な戦中派」(同上)意識と言ってもよいだろう。「当時国の置かれている状況を客観的に知る術を持た」なかつたと正確に述べる松元は、朝鮮が植民地でありそこで日本人として自己成型したという事実を、客観的に知る術を持たなかつたことや、り言わざるを得ない。一九六八年のマイ・ホーム主義と佐世保事件への時評においても、無規定な「日本人」という語が多出している。英国留学した漱石についての論や米国の原爆論は、その後に深化させられているが、「アジア」との関係性における「日本」論は、管見の限り松元には存在しない。戦後知識人が陥りがちな無意識化した日本ナショナリズムが見いだされるのである。

この松元を、松元も親交があったという同世代(松元より三歳年下)の平岡敬(一九二七年生まれ)と対比させよう。平岡は小学校四年時に日本海に面する朝鮮に移住し、小学校五、六年時に広島市に住むが、中学は朝鮮に戻り京城中学校、一九四四年に京城帝国大学予科に進学⁽³⁷⁾、一九六五年に日韓基本条約により国交が回復された後、中国新聞記者としていち早く在韓被爆者の問題に取り組む。同年一月からの連載で在韓被爆者の実情と支援を訴え、一九六六年の『世界』四月号にも執筆した⁽³⁸⁾。自身の朝鮮体験については、「湧き起る歌声」(一九七八年)、「ぶかぶかのスケート靴」(一

九八二年)、「歳月」(一九八八年)というまとまった文章を発表している(平岡 二〇一一:一六七・九〇)。これらの記事と論文、『偏見と差別——ヒロシマそして被爆朝鮮人』(一九七二年)の著書と平岡の活動を、広島にいた松元はもちろん知っていたことだろう。

平岡は、被爆地広島で戦争責任や加害責任が議論され始めたのは、一九七〇年ごろからとしている。「被爆地広島で、戦争責任、歴史責任の問題が議論され始めたのは一九七〇年ごろからである。それは朝鮮半島の被爆者たちによって、私たちに突きつけられた」。こうした突きつけに対して、広島では戸惑いが見られながらも、「自らの被害と日本の加害責任を重ね合わせて考えようという動き」も出てきた(平岡 二〇一一:三二七)⁽³⁹⁾。

広大でたまたかっていた松元に、平岡が言うように社会認識としてまだ生起の途上にあつた朝鮮人被爆者と日本の植民地責任について、その意識に欠けると述べることは後世の後付けのな裁断かも知れない。しかし、敗戦と「大学紛争」について自分なりに徹底して考え、それらについて(また「平和」についても)多くを書いた松元が、七歳まで自己成型した朝鮮について論じていないことは惜しい。二一世紀に松元を論じる際、戦後日本の知識人の一断面としてこのことは事実として認識されて然るべきだろう。

② 自然化したジェンダーと家庭観

大正末生まれの戦中派で、東大出のサラリーマン男性⁽⁴⁰⁾——フェミニズム界限では、その人物がよほどの女性解放的な主義主張を持たない限り、ある程度の家父的な男性像が想像されることだ

ろう。松元もそのイメージから自由ではない。松元は、一九六八年、当時のマイ・ホーム主義について述べた文章の中で、「主人、奥さん」「子供」を連ねた「一家連名」の典型的な年賀状について、「気にな」「照れ臭く」感じながらも、「私自身の中にも」「一家の主人」が存在すると告白している（松元 一九六八：二一三）。さらにこう述べている。

世の硬骨を以て任ずる人々は、こういう年賀状を見て、父の權威の失墜を嘆き、男どもの女性化を憤慨し、「マイ・ホーム」主義を指弾するに違いない。私の中にもそれに似た感情がなくはない。（中略）私はこの年賀状が示しているような、ものやさしい「一家の主人」を全面的に肯定したいとは思わぬが、かと言つて、昔のように「一家の主人」の名前だけをでかかど印刷して、妻も子供もその陰におしこめてしまうような「男性的」なものには一層の抵抗を感じる。どちらかを選ばねばならぬとすれば、歪んだ顔で「ものやさしい一家の主人」の方を私は選ばざるを得ない。（同上：二三）

松元は、自分より一世代上の「家長」的なあり方からすれば、一九六〇年代のマイ・ホーム主義は男性の「女性化」であると見られるはずだが、自分はどちらかと言えばそう批判される側にいると述べている。松元があちこちで論じる敗戦による「価値の転換」（同上：六）は、第一義的には天皇制から民主主義へという言葉で表現されるものであるが、そこには同時に、女性の権利や発言力の高まりという「価値の転換」が存在している。そのこと自体を松元

は明確には論じていないが、彼は時代の変化として感じ取っているであり、上の年賀状のくたりなどから、そうした松元自身の感覚が鮮明に読み取れるのである。

松元のこのような姿勢を確認した上で、「廣大紛争」の連作を見よう。④「授業再開」には、教室の創始以来、女性で最初の助手になった江崎早千子という準主人公が造形されている。彼女は、菅沼教授の指導の下に学部から大学院に入り、修士修了後に助手となった。状況の中の江崎の心境の変化を、④はこう描き出す。

六月初めまで、江崎は他の多くの「教官」同様、学生が校舎を封鎖したことに對して行き過ぎだと捉え、怒りすら感じていた。しかし六月初めに教室単位での話し合いが始まった後、講座制の「支配と従属の關係」や、形式化し目的化している単位制度の弊害などが議論の対象となり、それに対する教官達の態度が思ひのほか「冷淡」であったことから、彼らと大学への気持ちが萎み、学生の気持ちに共感を持つようになる（二〇四・五頁）。江崎は、現在まで勉強に没頭していたこともあり、自分の周りの男たちを異性として意識することがほとんどなかった。近づこうとする男性に彼女は不潔感を感じ、彼女は「そんな自分を女として不完全なのではないか」と思うこともあった（二一四頁）。江崎はしかし、学生の議論を引く張る四回生の狩野に好意を持ち、「自分の弟であるかのように妙に甘たるい気持ち」が生まれる（二一五頁）。

残念ながら短編の「授業再開」は、江崎が教室における議論の中で大学での研究に絶望感を持つに至る地点で展開を止め、その後の連作にも、江崎に類似する人物が登場しない。「先行研究」で岩崎が述べたように、虚構（仮構）の設定の追究が十分になされてい

るとは言えないのだ。ジェンダーを松元がいかにか描いたかを検証するに、ここでは以下の二点をさらに追加して考えたい。

ひとつは、先にも触れた「現代における致し方ない正しき——マイ・ホームと三派系全学連」（松元 一九六八）における、エディプス関係を想起させる以下の記述である。佐世保エンタープライズ事件の武装した学生たちについて、松元は、「理不尽に暴走する若いエネルギー、せいぜい親父の権威にやみくもに反抗する息子の身もだえ」（同上・三三）を当初見ていた。しかしその後、学生の運動が佐世保市民と連帯するのを見て、学生運動にも「致し方ない正しき」があるのだと自身の考え方を変える（同上・四）。

二つ目は、④における、早く父親を失い、「父親の味を知らない」篠村周一という大学院生である。教室の主任教授重山はそんな篠村を「かあいがつて」、家呼び、食事をとらせ親密な交流をする（一〇六頁）。ここでは教員と学生間で疑似的な父子関係が演じられているが、このパターンナリストイック、つまり温情主義的Ⅱ家長的な形象を松元はそのまま描いている。篠村は「学生会の動きには批判的」で、「大学側の肩ばかり」持つ人物である（一〇八頁）。松元は小説の最後に、篠村が重山に対し「憐憫の情」を感じ、「おやじが危ない」「そんなことをさせるものか」と言わしめている（二〇頁）⁽⁴¹⁾。

これらから以下のことはいうるのではない。四〇年以上の自己成型してきた歴史の中で、松元のジェンダー観や家庭像は、やはり一九六〇年代から七〇年代の四〇代「戦中派」男性として、時代の枠を大きくはみだしたのではない⁽⁴²⁾。広大紛争小説群において主人公の「妻」は名前を与えられず、⑧において背景の一部とし

てしか登場しないこと（七、一〇頁）も、それを物語る。フェミニズムからすると批判の対象となる価値観から松元は逃れられない。江崎についての「自分を女として不完全なのではないか」と思う記述や、佐世保事件と大学教員と弟子の関係性についての記述は、それ以上の展開や意味が与えられないため、やはりステレオタイプなイメージの無批判な再生産となつてしまつて⁽⁴³⁾いる。

③ 大岡昇平をめづつて

この松元のジェンダー観は、連載のち一九九四年に出版された『小説家 大岡昇平——敗戦という十字架を背負つて』にもつながつている。本書における、大岡の小説『花影』（一九五八年より連載、発行一九六一年）読解を見よう。

『花影』は、おれにだつてこの位のもは書けますよという匠気だけで書かれた、当時流行の風俗小説の一つというようなものではない。『俘虜記』や『野火』に、戦争中の作者自身の自我を対象化したのと同じように、「昭和三〇年代の大衆社会状況」に「絶望」している作者の自我を、『武蔵野夫人』の道子以来作者の中に生き続けてきた、或る意味で作者の理想の女性像に連なるべき葉子という女主人公に仮託して描いた、大岡昇平の「私小説」となつて⁽⁴⁴⁾いる。絶望して死のうとする葉子の心情は、少し誇張して言うならば、作者自身のものであつたと

一九〇九年生まれの大岡は「昭和三〇年代の大衆社会状況」に「絶望」していた。一五歳年下の松元によれば、大岡にとりそれは、経済的繁栄の中で急速に失おうとしている「戦争——敗戦の記憶」であり、「日本人全体の精神の内部」で「何か」が決定的に「くずれて行」かないではない状況である（二二頁、強調中村）。とは言え、「理想的女性」の形象化に自己の思いを仮託する行為は、（植民主義的）領有ではあり得ないか。

この部分に関連し、それを批判しない批評を書く松元は、ジェンダーに敏感であるとは言えず、大岡と共犯性を持つてしまっている⁽⁴⁵⁾。「家」と経済的安定を持たなかつた葉子と、そうではない大岡——松元は、立場（主体位置）が異なるのであり⁽⁴⁶⁾、戦中派と家父長的な価値観を、変化する時代の中で「理想的女性」に仮託し押しつけるものになっている。『花影』のモデルが大岡の愛人であると述べているのは、巖谷大四の『戦後・日本文壇史』（一九六四・六二・六五）である。つまり松元のジェンダー観は、大岡の「封建的」なそれに近似しそれを許している。大岡の女性像は、松元によれば、男性兵士の戦争経験との関りにおいてのみ描かれてしまったのだ⁽⁴⁷⁾。松元の読みに基づけば、大岡の主たるモチーフ（精神の定点）は、戦争経験とくに戦場経験の（復員後も継続する）暴力の描写にある。裏を返せば、大岡の以上の小説は女性やジェンダー関係を描くことに主眼があつたわけではなく、松元もそのことについては指摘しない。『武蔵野夫人』の主人公の一人である道子という名前は、大岡自身「封建的な因習を象徴する」と述べていた通りに（松元一九四・七八）、大岡の理想的な女性像として設定されていた。夫の不実、不倫までも「自分の罪」と感じる道子は、今から見れば前

時代的である。勉と道子の間で交わされる「道徳」あるいは「道徳より上のもの」に関する議論から、松元は道子の中の「（だらけではないもの）」の尊さを掬いだそうとする。大岡—松元のラインは、変質しない（で欲しいと願う）価値観を描こうとするために、「古風」に振る舞う女性像をそのままに形象化し、その上に乗っていると批判されうるだろう。

ところで、大学における学生運動の心情はいかなるものだったか。これを描いた小説は多いし、「全共闘文学」とも概念化されている（黒古一九八五、鈴木一九八九）。この大きな課題をここで展開することは出来ないが、広島大学に関わつてひとつの経験を紹介しておきたい。

⑤「失われた時」と同時期に広島大学に在籍していた渡辺文恵（一九七一年入学）は、一九七二年五月に政経学部社会科学研究会（社研）のメンバーから「強姦された」ことについて『全共闘からリブへ』（一九九六）に寄稿した（渡辺一九九六）。その男を「糾弾」したのは「一年以上消耗したあとの一九七四年」であり、前年に学内で作られた「広島おんな解放戦線」（女解）のメンバーの一人に励まされたことだった。当時の状況を渡辺はこう語る。

一九七〇年から始まったウーマン・リブの運動が学生運動内の女にも、そして男にも影響を与え始めていて、各セクトもスローガンとしては「女性解放」を差別問題の一つとして掲げられるようになっていた中での「女解」と私の糾弾闘争であり、「社研」側でもまじめに受け止める姿勢を示すしかない状況へと変わっていたのだと思う。それ以前は、性差別について話をしよ

うとすると、まず他のより重要な政治課題に取り組み、左翼理論で論争し、男の論理的な言葉で述べられるようになってから論破してみろという態度だったのだ。(同上：一五三)

学生委員も一時期務め、学生の状況にある程度の関心と理解を保持していた松元だから、こうしたことも知っていた可能性があるが、ジェンダーの問題が「広大紛争」小説群のテーマとなることはなかったのである。

七 松元が直面していたものとは何か

以上のように松元には、植民地の歴史とジェンダー問題、戦後ナショナリズムについては逆説的にしか見るべきものを持つていなかった。しかし、松元の「広大紛争」小説群は、先に触れたように学生たちの広大と教員への鋭い問いかけの内容とそのプロセスを詳細に描き出しただけでなく、教員同士・学生同士の対話と対立にも、かなり踏み込んで書いている。特に、架空の大学としながらも自らの当事者としての体験をふんだんに盛り込み、一九六九年前後の大学教授会の雰囲気や、団交の様子、学生運動に対する大学運営のあり方に鋭く切り込み、詳細にリアルに描き出している点は注目されてよいだろう。⁽⁴⁸⁾

先に見たように、先行研究の岩崎清一郎は、③「崩壊」での助教授久倉の無力感と教授たちの保身、学生たちの無理解に言及しつつも、「記録と仮構(ライクシオン)の双方に「徹しきれない甘さ」を本小説群に指摘していた。ここでは、この記録と仮構の問題のほ

かに、松元が力を入れて書いた、状況への困難な対処と葛藤という点について触れておきたい。松元の小説群を読む限り、また松元が向き合っていたものを描く際に、この点は重要だからである。松元の執念のような細かさと共に、直面した論点をえぐり出していく力が、本小説群において発揮されている。

① 日本の大学における英語教育の意義について

⑧「名前のない行為」では、英語教育の目的をめぐる集會に請われて参加した助教授の外村が話を展開し、学部生の木島がそれに反論する。大学教育とその体制を問い直そうとする論点の一つが、松元の関わる英語教育に即して展開される。外村は、英語教師になつていく学生の多くにとり、大学を含め学校教育が「おもしろい」という関心を掻き立てないもの」になつていふことを認識しつつ、セクト系の運動に携わつていない森村らの学生がデモ行進に参加するようになつた姿に、彼らの「純粹さを受け止め」たいという熱い感傷と、大学での仕事への充実感を覚える。外村は学生集會で、英語教育を、国語や言語の教育と重ね合わせて再度捉え返さなければならぬと主張する。

これに対して、人文科学部共闘委員会メンバーの木島は、国語教育と組み合わせる外国語教育が、なぜ中国語や朝鮮語ではなく英語なのか、また明治以来の日本の英語教育が、日英同盟や日米安保といった国策と密接な関係を持つていふことへの歴史を問う。木島の指摘は英語教育の産学共同体制という一つの本質を突くものと、外村も認める。別の学生は、米軍の兵器産業に関わる「××工

業」から研究資金を得ている工学部の教員を問題化する。木島の主張に対し外村は、その鋭さと同時に、性急に行動しなければという「論理のぎめの荒さ」(二〇頁)を感じる。

さらに外村において、教員に「暴行」したとして同僚に告発され逮捕された学生への対処問題も重なり、「行動の論理」として正しさを実行すること、言葉のやり取りを否定しないことの双方が葛藤する。松元は⑧で、全共闘の主張の正しさを認めつつ、それを性急に革命や広島大学の解体に直結させないという立場を取っているように見える(本点は第八節で再論する)。

② 機動隊導入をめぐる思考の葛藤

一九七二年の衝突を描く⑤「失われた時」には、「二年半前」の「紛争」後に学生補佐委員となった須田の悩みぬく心中と葛藤が、かなりの紙幅を割いて吐露される。文部省の学費値上げに反対して学生が教養部を封鎖し、教官会では各種試験に差し支えるという理由で、早急に警察力を導入してほしいと決議される。過去の紛争時の大学方針(封鎖を盾にした「困交」要求は飲まない)に依拠し、学生の要求をねばり強く聞こうという柔軟路線の主張は封じ込められる。須田はこう考える。

学生達を支えているのは、ただやり出した以上やめられぬ、やめることは敗北だという切端つまった感情であるようだった。そのような状態のところへ機動隊を導入することは、むしろ手掛りを失っている学生達に運動拡大のきっかけを与え、多くの

学生を付和雷同させる因を作ることにしかならない。しかもそのことは終局的には、学生の要求の中に含まれている正しい部分までも抑圧する結果を招く。それは、二年半以前に、この大学が既に一度経験したことをただ反復するだけのことでないか。(二一〇頁)

事態は、学生たちが学長を学生会館に「連れこん」だ(学生委員長)ことにより緊迫の度合いを高め、須田もここに至って警察力導入について「最終的には外に方法がないと思います」(二二五頁)と、葛藤を抱きつつ答える。ここから延々と二段組三頁以上にわたる、須田が学長補佐になった経緯と心情の吐露が語られる。

学生の異議申し立てを機動隊導入によって抑えつけ、学生を次第に無気力状態に追いこみながら形だけ称えられる大学改革は、彼には質の悪い欺瞞たぶとしか思われなかった(二二六頁)。

しかし、自分が「教官として」これこそ行くべき道だと思えるものを見出していない以上、学生に向かつてそんなことはやめると言う資格はないと悟る(二三〇頁)。「学生を教える立場にある教師として」、機動隊要請を事前に学生に通告すべきだという須田の意見(二三一頁)も、結局は却下される。結果、その夜機動隊は導入されることになる。月が二つに引き裂かれる姿を須田が自分に重ねて、本小説は終わる。ここに描かれたのは、学内向けパンフレットにおける、ねばり強い学生への説得という一貫した主張とはやや位相を異にする、須田の敗北し引き裂かれる姿である。

③ 松元はいつ全共闘的心性と繋がったのか

本草稿を読んだ河西英通氏は私信において、①「まだ来ない明日」（一九六九年冬発行）における「廃墟」論は重要な核心の一つであり、この点で「松元は全共闘学生と繋がった」とする見方を示している（二〇二〇年五月）。このことをもう少し検証しておきたい。

①の、「一切が無に帰した廃墟」を「今もう一度、思いを新たにして」「通り抜けなければならない」という宣言が、九編の連作の最初に登場していること。①の最後に、おそらく脱稿した「昭和四三年八月」という期日（一九六八年八月）は、その認識に至った日付である。①は一年以上を経て一九六九年冬に出版されるが、その間に松元は、一九六九年八月三〇日付で学内向けパンフレットを公表している。実際の学長「カン詰め」事件の一九六八年二月から翌六九年八月までの一年半、そして連作九編を書き終わる一九七六年までの七年間、松元はブレずに「廃墟」を廃墟として認識し通り抜けようとした。

正確に述べれば、③の「崩壊」で、自らを学生と教官の間の「こもり」に例えて自己の崩壊感を記述したように、小説中の久倉助教は精神的・思想的には大きく揺れ動いてもいた。一九九九年の回想で、松元は当時大学を辞そうかと苦悩したことを記しているし（松元 一九九九年）、⑤「失われた時」ではその姿が詳細に描かれた。しかし、そのことを思考の対象とし得た松元は、現実世界においては「全共闘学生と根底のところでは繋がりが得た」と言えるだろう。先の節で述べたように、学生との繋がりは、廃墟を廃墟とし

て見なければならぬという、松元の敗戦経験に根差したものであった。これが、後に展開されていく原爆と米国式民主主義、平和の問題——「ヒロシマという思想」（松元 一九九五）——へつながっていく（この主題の展開については別稿を期したい）。

このことを裏付けるもう一つの文章が、①よりも一年以上前の一九六八年夏に発表された時評「現代における致し方ない正しさ——マイ・ホームと三派系全学連」である。この文章で松元は、「廃墟」という語を「敗戦」に重ねて使用し、「廃墟」は日本人にとつて何であつたか、それはバラックから鉄筋コンクリートが建てられたように「完全に克服されたのであろうか」と問う（同上：五）。

松元の主張は、「敗戦によって生じた価値の転換という事件」を「日本人」は未だ直視し総括し得ず、米国やソ連の価値観（「グラフ用紙」を「つぎ足そう」とするも、「戦後二三年」つまり一九六八年）、「われわれのグラフ用紙」をついに手に入れることができなかったというものである（同上：六・七、強調原文）。松元によれば、タイトルの「マイ・ホーム」主義と一九六八年一月の佐世保事件に代表される三派系全学連と市民の支持は、資本主義と社会主義という「グラフ用紙」の別名であるものの、自身の価値観の確立に向けた「致し方ない正しさ」の「徴表」（同上：八）なのである。

同じ文章で松元は、一九六八年二月二〇日の広島大学学長「カン詰め」事件について語っている。ここで松元は三派系全学連の学生たちと対面し議論したが、「これが『学生』なのだろうか」という「どうにもしようのない失望感」を感じたことを率直に吐露する。この学生たちの強硬な行動は、「彼らの側に立つて動くべき立場にある教官の多くに（その中には学生達に同情的な気持をもっている人々

がかなりある)、かえって学生達に対する不信感を強めたことで、佐世保の場合とは逆にマイナス面が目立ったように思われる」と言う。しかし冷静に考えれば、「大多数の学生は純粹に、奨学資金打切りにあらわれた文部行政に対する憤りで動いていた」はずであるとし、そうした「学生達の心情」は信じたいとする(同上・九)。「ベトナム戦争を支持し、日本の核武装をすすめる」とする「権力」が維持する「秩序」を学生たちが信じていることができないのは当然であり、力によって学生たちの運動を鎮圧しようとする体制の動きが既にある時に、「われわれ教官がそれに力をかすことは、今でさえ困難な学生との対話を殆ど不可能にする以外の何ものでもない」と結論付け、実際の「对学生措置」としては、「ねばりづよい」対話を忍耐しかなないと述べる(同上・一〇)。

この文章は、一九六八年の夏号の『歯車』に掲載された。一月の佐世保事件、二月の広大学長「カン詰」事件があり、その後脱稿したものである。先に述べた①「まだ来ない明日」(一九六九年冬発行)は、一九六八年八月にはほぼ脱稿していたと見てよい。つまり、松元の以上のような認識は、一九六八年の上半期に、いくつかの事件を時評としても小説としても書くことによつて結晶化されていったと、ひとまずは言えそうである。その思想性が、一九六九年八月の学内向けパンフレットにも現れたのである。

①「まだ来ない明日」の執筆により「松元は全共闘学生と繋がった」という表現は、モデルとなった一九六八年二月の学長「カン詰」事件の時点において、未だ広大全共闘(結成は一九六九年一月)が登場していないため、正確ではない。しかし上に見たように、松元は「三派系全学連」の背後に全共闘の心性と問題意識をはつき

り読み取り、それへの連帯を表明していた。その意味で、松元が①の「廃墟」論を介して全共闘の心性に繋がりが得たとする言い方は、正しいと言える。

八 加藤典洋「ゆるやかな速度」と政治の問題

「広大紛争」小説の執筆から約二〇年の後、一九九三年発表の「大岡昇平、一九六一年の転換」(『小説家 大岡昇平』所収)において、松元は加藤典洋(一九四八―二〇一九)の「ゆるやかな速度」という概念を積極的に援用した。

① 「ゆるやかな速度」と政治

「ゆるやかな速度」は、単に「速さ」の不足としか解されない「遅さ」ではなく、別種の、いわば「速さ」の「外部」としての「遅さ」あるいは「ゆるやかさ」である(松元 一九九四・一三九)。これについて、加藤が松浦寿輝を引きながら述べる以下の説明を見よう。松浦は、ルソー的な反進歩主義や、ロマン主義的信仰に見られる前近代的「遅さ」について、ヒッピー文化やF・カブラ『タオ自然学』(邦訳一九七九年)を例としつつ、これらが「速さ」のイデオロギーの反措定に過ぎないとしていた。

ここにいわれる「ゆるやかさ」は、「そうしたものとは異なる絶対的なゆるやかさ、『速さ』の反措定として定義されるのではないただ単なる『遅さ』」そういうほかないものなのである。

ここで加藤は、反近代という形ではないスタイルで、近代の速さをいかに批判するかという難題に取り組んでいる。松元はこれに親和性を持って、大岡昇平の精神的基盤を理解する。松元の議論は、現代仮名づかい(速き)と歴史的仮名づかい(遅き)の二項対立の外側に、大岡は「ゆるやかな速度」として「現代仮名づかいを批判するために敢えて現代仮名づかいを用いる」という方法を採用したというものである(同上・一七三)。

松元は、『小説家 大岡昇平』の第五章「(戦後)から(戦後・後)的狀況へ」で、大岡の政治的立場についての私見を記している。「大岡の立場は、もともと政治的革新ではないし、またこの場合にそう見られかねないような保守でもない」(同上・一九九)。この点は、松元の姿勢に重なるのではないか。

『萌野』の中で大岡が自分の立場を示す言葉として認めた「反抗者」という言葉をここで用いるならば、大岡は、革新(天皇制否定論)に対しても、保守(天皇制賛成論)に対しても、同じようにそれに同調することを拒む「反抗者」なのであり、その立場から、天皇という役割を生きた一人の人間の実存を、「いたわしい」と見ているだけなのである。彼は、最も根源的(ラディカル)な立場に立って、人間におけるもっとも根本的(ラディカル)なものを見ようとしているのであって、それを彼に可能にしたものが、彼の内部にある「ゆるやかな速度」の感覚であったと私は考えるのである。(同上・二〇〇)

ここでは、近代／反近代の対立の止揚の論点が、天皇制に関する保守／革新の対立の止揚へとスライドしているが、松元の立場は、その二項対立を超越した自分でありたいし、またあるはずだということである。松元は、「大学紛争」小説執筆の約二〇年後にも、ダブルバインドあるいはジレンマに引き裂かれる人間のあり方を注視し、それを書くことによつて自分自身を確認している(確立しようとしている)ように読める⁽⁵⁰⁾。

松元の広大紛争小説において、どっちつかずの「こうもり」としての自分の淵に沈む描写(③「崩壊」)や、引き裂かれる二重の月に譬えられる助教の姿(⑤「失われた時」)があつたが、それは、学生運動と大学管理当局という二者対立に挟まれた教員としての松元と重なるものであつた。一方で、学内パンフを発行し、問題の核心を問うた論理性と強度を持つ松元がいる。それは、一九九〇年代に加藤を経由して松元が見いだした「ゆるやかな速度」の、一つの政治的結晶と言いうるものだったのであろう。しかし「松元を讀む」限り、理念的統一の主体は、成功していないように思われる。引き裂かれ無限の淵に沈みこむ松元と、学内パンフの力強い松元。このような分裂は近代主義的論理からすると批判の対象になるかもしれないが、しかしそうした分裂自体が体現しているものが、本来の人間であるならばどうだろうか。私は松元をそうしたあいだに感じる。

先に、⑧「名前のない行為」において、松元が全共闘の主張に対して、性急に革命あるいは広島大学解体に結びつけない自身の立場を表明していることを指摘した。同様のことが、一九七八年の『象

牙とチヨーク』のあとがきにも記されている。解決の困難さに「絶望的」な気持ちを抱くと言いながら、松元は学生に呼び掛けるように述べた。

私自身もいささかそうであり、学生諸君の先輩たちもそうであつたように、余りに性急に結論を求めようとするのが、かつて問題の所在を見失わせることになるということには、充分に心してほしい。大学というところは、大学の教師や学生だけの意志で動かすことのできない、つまり大学の外の社会とひとつらなりの場所であつて、大学を変えようとして大学だけが変るといふようなことはありえないことだからである。(「あとがき」、頁数なし)

改革や革命の「急進派」からすれば「反動的」とも取りうる表現である。しかしこれが、松元なりに苦闘した大広紛争を経ての言い方であることにも、留意したいと思う。そして、「地道で根気づよい小さなことの積み重ね」を一九七八年の松元は説く。このことが、一九九〇年代に出会う「ゆるやかな速度」の中身でもある。それは、二一世紀の(広島大学教員である)私や、これを読み生成される「私たち」に、一定の重みを持つことであるように思われる。

松元にとり、名辞としての「政治」は、何よりも政治運動家や政治家が行うものと捉えられていたようである。松元がM・フーコーを吸収しようとした形跡は見当たらないし、J・パトラーの行為遂行性(performativity)概念が日本で議論され始めるのは、松元がこの世を去るころであつたと言つてよいだろう。だから、家族関

係の比喩により教員と学生を描いたり、ジエンダーを緊張感なく無批判に描き出したり、説明抜きの「日本人」の語を使うことが、すなわちある磁場においては政治である——つまり、事実確認的発話も行為遂行的発話であるということは、松元にとりおそらく自覚されていなかった。学内パンフレットを配布したことそれ自体が、学内政治を打つし演じてしまうという含意を持つてしまうことを、対象化して(つまり「自己」への差延的運動として)捉えていたかは疑わしい。

松元には素朴に、自分は自己の信念に基づいて発言しパンフをまいた、と捉えていたのではないか⁶⁾。私はここでは松元に、ある種の「天然」さ(ナイーブさかもしれない)を読む。行為が「演じられている」とメタ的に捉えられていないことが、小説群が記録にも仮構にも徹し切れていないのではないかという岩崎の評価に、つながっているようにも思えるのである。松元は小説群を書きながら、それを楽しめていたか疑わしい。一九七一年の「高橋和巳覚書」では九大哲学科の鬼頭英一氏の自殺にも触れており(松元一九七八・一三四)、そうしたことを意識し苦悩しながら執筆する生真面目な姿が浮かび上がる。それは、小説群が結局は出版されなかったことにもつながっているだろう。松元にとつてこの小説群は、自己の精神的葛藤の限界を突くものであると同時に、大学制度の欺瞞を世に告発するという、実直で誠実な問題意識に貫かれているように思える。

「天然」であり「実直で誠実」という表現は、一九七一年五月四日の日付が記された、高橋和巳(一九三一—一九七二)についての右の文章(サブタイトルは「解体の果てなる死」である)にも当ては

まる（松元 一九七八所収）。高橋は前日の五月三日にこの世を去った。封鎖解除後二年近くになる広島大学構内を松元は歩きながら、武田泰淳の「司馬遷は生き恥さらした男である」という言葉を想起し、「私が今大学教師として生きているこの生」は「生き恥」である」と述べる（同上…一三五）。どのような論理においてか。松元はこう述べる。

大学の「教官」であることは、問題に対してどれだけ誠実であろうとしても、その誠実を貫きえぬ情況に身を置くことに外ならなかった。学生に指摘され、その本質的意味を失いながらなお教師を束縛しつづける大学の諸制度、なかんづく講座制、教授会制度の中で、教師はそれを「改革」するためにはその束縛を破砕しなければならないにもかかわらず、その制度の枠内でしか行動できぬというジレンマを強いられていた。そこでは、誠実は忽ちにして「保身」の弁舌に転化せざるをえない。（同上…一三六・七）

教師として自己規定しかつ国立大学「教官」の立場にあつた松元が直面していた難題は、大学制度の内部にありながら、学生の声を聴きつつ制度を革新していく実践的方法論であり理論とは何かという問題であつた。それに即解決をもたらす解答は、ない。松元は、高橋和巳の死に応答するためには、司馬遷のように、自らの『史記』を書き残すほかないとして文章を閉めている（同上…一三八）。一九七一年五月、松元の「大学紛争」小説は③「崩壊」まで書かれていた。こう考えて、つまり高橋和巳の死を経て、「生き恥」を

さらしつづつという自覚のもと、松元は④以降の小説を継続して書いていった。

② 栗原貞子との対比から

以上の松元と対比すると、一一歳年上の栗原貞子（一九一三—二〇〇五）は、自分の書くものが常に政治的含意を持つてしまうということを自覚していた。広島思想家としても松元を輪郭付けるために、ここで、松元と付かず離れず影響を与え合つていたと考えられる栗原貞子との対照を簡単に試みたい。⁵²⁾ アナキスト栗原唯一と結婚し、アナキズム系雑誌『リベルテ』にも投稿していた栗原（例えば栗原 一九四九）に、自己の意見を書くことの政治性は自明であつた点で、ここに松元との差異が存在する。栗原の天皇制批判に對し、管見の限り松元に天皇制批判はない。

福岡良明は『焦土の記憶』（二〇一一年）で、栗原貞子と松元寛の原爆文学論争（一九六〇年における「第二次」）や両者の政治との関わりを振り返りつつ、「被爆体験と原水爆禁止の政治主義を訴えようとする栗原貞子に對し、松元寛は体験と政治主義の双方に距離をとる傾向が見られた」とまとめている（同上…四一二）。福岡が言う松元の「体験への距離」とは、被爆体験が体験者にしき理解できないときれがちだつた言説状況に、松元が批判的だつたということである。松元は、栗原のように被爆してはなかつたが、母親を原爆で失つたという微妙な位置をずっと自覚していた。つまり、松元が「体験と政治主義の双方に距離をとる傾向が見られた」というのは、より正確に言えば、松元は自己のポジションナリティを確認

しつづつ体験へ接近しようとしたのであり、既存の党派的政治には距離を置きつつも、継続して原爆責任と平和の創造を思考し言葉に続けたのである（松元の平和論については別稿を期したい）。松元は決して「日和見」ではなく、「ゆるやかな速度」という強度をもって政治にコミットし続けたと言えよう。

対して栗原は、自分が体験した原爆と被爆を書くことが第一に課題と認識されていたため（福岡二〇一一・三三九・四四）、松元のような微妙な位置性（あるいは様々な当事者性からなる体験の分有の問題）については深く探究しなかつたと言える。松元が、全共闘ら学生たちと、大学制度を保守しようとする教員たちとの位置を継続して確かめ調整し続けたことは、小説群のこれまでの分析からすでに明らかであろう。

福岡が軸として問題にしているのは、戦後日本における被爆を含めた戦争体験と「政治」の関連性であり、その両者の距離である。

残念ながら福岡はそれらを羅列し整理するのみであり、栗原と松元が、強弱の差はあれ触れ、苦しんだ広島と戦争・植民地問題の思想化という課題には辿り着かない。「広島文学」をどう見るか、どうしていくかという論点において、つまり第二次原爆文学論争において両者は確かに対峙した。しかしそれは、自分のポジショナリテイからどのように「広島文学」にアプローチするかの差異でしかなかった⁽⁵³⁾。

終わりに

松元は、おおよそ一九六八年から七六年にかけて、自己が関与

し巻き込まれ、重要だと思われた「大学紛争」について、多くの記述を小説や評論、パンフという形で学内に問い、世に残した。「生き恥」という表現（一九七一年）すら用いながら、「大学紛争」に關する小説を書き遺した。大学制度の「廢墟」の糊塗と欺瞞への強い批判を示したことは、コンクリで保存される原爆ドームの批判にも通底するものであった。松元の提示した「大学紛争」をめぐる論点は今も解決されず、読者はその議論の磁場に置かれるだろう。松元は観察し記述する自己の分裂を織り込みつつ、こうした議論を継続する社会—文学の場を創出しようと描いている。

松元は、革命や、大学変革についての急進的な動きには一定の距離を取っていた。晩年、そうした自己の姿勢を再確認し再確立しようとした際に使われた概念が、加藤典洋の「ゆるやかな速度」であり（一九九三年）、そのようなポリテクスのスタイルと意味で、松元は「広島文学」に貢献している。その後加藤の「敗戦後論」が引き起こした高橋哲哉との歴史主体論争を経たうえで、「ゆるやかな速度」からなされたとも言える松元の「廣大紛争」小説創作と政治のあり方を再検討するには、紙幅も尽きた。また本稿では栗原についてほとんど言及できなかったものの、二一世紀に栗原と松元の両者とその広島における社会文学の実践を読むとは、歴史経験と記憶を分有しつつ、戦争と植民地、またジェンダーなどの加害と被害の折り重なるメカニズムと、大学闘争と紛争の問題を明らかにしつつ議論し、それらの統合を思想的言葉として織りなしていくなことだと、その課題について考えている。

謝辞

本稿の作成にあたり、河西英通、川口隆行、木村逸司、阪上史子、高雄きくえ、下岡友加、中野和典、今林修、柳瀬善治の諸氏から、諸情報や資料、さまざまなコメントと重要な観点を、ご教示いただきました。広島大学文書館の伊東かおり氏にはコロナ禍の中で便宜を図っていただき、校正作業では楠田剛士氏にお世話になりました。また第六一回原爆文学研究会（二〇二〇年八月八日オンライン開催）では発表の機会をいただき、多くの有益なコメントをいただきました。それらをすべて十分に生かせなかつたのは中村の責任です。どうもありがとうございました。

引用文献

- 今井日出夫二〇〇九「広大紛争に想う（紛争座談会参加記）」『広島大学文書館紀要』一一・七〇・八〇
- 岩崎清一郎一九七三『広島の文芸——小説・評論』広島文化出版
- 二〇〇〇『広島の文学——ゆかりのある作家たち（六）（戦後篇）』『梶葉』Ⅷ：三八七・五五九
- 二〇一〇『同人雑誌』、岩崎文人編八八・九七頁
- 岩崎文人編二〇一〇『広島県現代文学事典』勉誠出版
- 巖谷大四一九六四『戦後・日本文壇史』朝日新聞社
- 折原浩一九六九『大学の頹廢の淵にて——東大闘争における一教師の歩み』筑摩書房
- 一九八一『学園闘争以降十余年——一現場からの大学・知識人論』三一書房
- わたしの現在を問う会編一九九六『全共闘からリプへ——銃後史ノート戦後篇』インパクト出版会

加藤典洋一九九〇『ゆるやかな速度』中央公論社

——二〇一六「歯車と小道——松元寛さんのことなど」『言葉の降る日』

岩波書店、二三九・二四六頁（初出『群像』二〇〇四年四月号）

河西英通二〇〇九『広島大学文書館編「証言 大学紛争」』『史学研究』

二六六・五二・五八

栗原貞子一九四九『政治と文学とアナキズム』リベルテ』四・六・九

——一九七五『ヒロシマの原風景を抱いて』未来社

黒古一夫一九八五『全共闘文学論——祝祭と修羅』彩流社

清水靖久二〇一九『丸山真男と戦後民主主義』北海道大学出版会

鈴木貞美一九八九『全共闘運動』と文学』『国文学——解釈と教材の研究』三四（四）・一七九・一八五

スピヴァク、G・C二〇〇三『ポストコロナリアル理性批判——消え去り

ゆく現在の歴史のために』上村忠男・本橋哲也訳、月曜社

高雄きくえ二〇一六『フェミニスト栗原貞子の発見』——占領下のミニ

コミ紙を読む』、高雄きくえ編『被爆七〇年ジェンダー・フォーラム』

広島「全記録」——ヒロシマという視座の可能性をひらく』ひろしま

女性学研究所、七・二九頁

滝沢克己一九七二『私の大学闘争』三一書房

中村平二〇一九『家族・国家日本の殖民暴力とトラウマ——脱殖民化と

『他人事でなくなる』、田中雅一・松嶋健編『トラウマ研究』二

トラウマを共有する』京都大学学術出版会、四一五・四四一頁

——二〇二〇『台湾先住民における轉型正義／移行期正義と日本の植

民地責任——太魯閣戦争／戦役と霧社事件をめぐる『和解』の動き

から』『比較日本文学文化研究』一三・一〇三・一三〇（広島大学）

平岡敬一九七二『偏見と差別——ヒロシマそして被爆朝鮮人』未来社

—二〇〇一『時代と記憶——メディア・朝鮮・ヒロシマ』影書房
—二〇〇一『ヒロシマ再考』ノート『時代と記憶』、三〇二・三三三
三頁

—広島大学二十五年史編集委員会編一九七七『広島大学二十五年史 部
局史』広島大学

—広島大学二十五年史編集委員会編一九七九『広島大学二十五年史 通
史』広島大学

—福岡良明二〇〇一『焦土の記憶——沖繩・広島・長崎に映る戦後』新
曜社

—二〇一六『広島・長崎と『記憶の場』のねじれ——『被爆の痕跡』
のポリテクス』『立命館大学人文科学研究所紀要』一〇〇・一一一
・一三七

—編集部（酒井武史）一九六九「職と学問を『賭けた』人たち」『朝日ジ
ヤナル』（特集：造反教師）六月一五日号、四・六頁

—横林滉二二〇一〇「松元寛」岩崎文人編、四三三・四三四頁
—松元寛一九六一「歯車私記」『歯車』一一（一九六二年秋）…三六・四
六

—一九六六『日本のハムレット』文化評論出版社
—一九六七『シェイクスピア悲劇の世界——虚無の鏡』文化評論出版
社

—一九六八・六「現代における致し方ない正しさ——マイ・ホームと
三派系全学連」『歯車』一六（一九六八年夏）…二・一〇

—一九六九・一二「まだ来ない明日」『歯車』一八（一九六九年冬）
…四・三三

—一九七〇・六「パラダイス・ロースト」『歯車』一九（一九七〇年

夏）…七八・九五

—一九七〇・一二「崩壊」『歯車』二〇号（一九七〇年冬）…二二七
・四二

—一九七一・一一（冬城浩）「授業再開」『歯車』二一（一九七一年
秋）…一〇二・一二〇

—一九七三「わがまち、ひろしま」（広島文化叢書六）広島文化出版
—一九七三「一九六九」『幻想としての道Ⅱ平和公園』『わがまち、ひ
ろしま』、五七・七一頁（初出『放送RCC』八号）

—一九七三・一（冬城浩）「失われた時」『歯車』二二（一九七三年
冬）…一一八・一三三

—一九七四・一〇（冬城浩）「遠い夜明け」『歯車』二六（一九七四
年秋）…三四・五六

—一九七五・六（冬城浩）「戦いの朝」『歯車』二七（一九七五年春）
…五四・八〇

—一九七五（冬城浩）「空洞を脱すべく進む広島大学統合移転計画の
あなたの空洞」『朝日ジャーナル』一七（二二四）…七九・八二（『象牙
とチヨーク』に「スプリング・デイドリーム——一九七五年春・広島」
として一六五・一七五頁所収）

—一九七六・二（冬城浩）「名前のない行為」『歯車』二八（一九七
六年春）…五・三三

—一九七六・一〇（冬城浩）「奇妙な幕間」『歯車』二九（一九七六
年夏）…一五五・一六七

—一九七八「象牙とチヨーク——体験的英語教師論」溪水社
—一九七八「一九六九、一九七〇」『われわれにとって真の問題は何な
のか——「教官の立場から」』『象牙とチヨーク』、一一八・一二二頁

——一九七八「一九七二」高橋和巳覚え書——解体の果てなる死』『象
牙とチヨーク』、一三二・一四五頁

——一九七九『シェイクスピア——全体像の試み』溪水社

——一九八二『広島長崎修学旅行案内——原爆の跡をたずねる』岩波
ジュニア新書

——一九八六『シェイクスピアの全体像——仮面と素顔のあいだ』研究
社出版

——一九九三『漱石の実験——現代をどう生きるか』朝文社（一九九
七増補改訂）

——一九九四『小説家 大岡昇平——敗戦という十字架を背負つて』東
京創元社⁽⁵⁴⁾

——一九九五『ヒロシマという思想——死なないために』ではなく「生き
るために」東京創元社

——一九九五「一九七三」「八・六、広島の意味するもの——一九七一
年、広島女学院大学における『原爆講座』より』『ヒロシマという思想』、
四七・六七頁

——一九九六「原爆を落としたアメリカ——ヒロシマの世界化とは」『思
想の科学 第八次』三九・一〇、一五⁽⁵⁵⁾

——一九九八『新版 広島長崎修学旅行案内——原爆の跡をたずねる』
岩波ジュニア新書

——一九九九a「戦争に追いかけられた青春」『英語青年』一四五（一）
・七

——一九九九b「二人の師と二人の友と（一）——中野好夫先生のこと」
『英語青年』一四五（四）・一六

——一九九九c「英文学を日本人の目で読む——大学紛争の中から（一）」

『英語青年』一四五（七）・一一

——一九九九d「英文学研究者としての夏目漱石——大学紛争の中から
（一）」『英語青年』一四五（八）・二六

——二〇〇三「好村さんに——、好村富士彦遺稿・追悼集刊行委員会
編『考えることは乗り越えることである』三三社、四七二・四七三頁

松元寛先生退官記念論文集刊行委員会編一九八七『松元寛先生退官記
念 英米文学語学研究』英宝社

松本滋恵^{ますえ}二〇一九「栗原貞子論——反戦・反核・平和を掲げ行動する
詩人として」広島女学院大学博士論文（Web公開あり）

宮崎裕助二〇二〇『ジャック・デリダ——死後の生を与える』岩波書店
渡辺文恵一九九六「学生運動からウーマン・リブへ」女たちの現在を問
う会編、一三〇・一三四頁

松元寛年譜（一九二四—二〇〇三年）

一九二四年 京城（ソウル）生まれ⁽⁵⁶⁾

一九三一年、東京で小学校入学。小学二年時に広島の袋町尋常高等小
学校に転入学。一九三七年、広島高等師範学校付属中学校入学（一
九七三・一四・三二）。

一九四一年 第一高等学校入学。

一九四三年 東京帝国大学文学部英吉利文科入学。

一九四四年二月—一九四五年九月 兵役のため同上休学。

一九四五年 八月、原爆で母を亡くす。

一九四五年 一〇月、東京帝国大学文学部英吉利文科復学⁽⁵⁷⁾。

一九四八年 三月、東京大学文学部英文科卒業。東京創元社入社。

一九五一年 広島高等師範付属高等学校教諭。

- 一九五二年 広島高等師範付属東千田中学校、高等学校教諭。⁽⁵⁸⁾
- 一九五四年 広島大学皆実分校助手。
- 一九五五年 広島大学皆実分校講師。七月、雑誌『歯車』創刊（一九九二年の四一号で廃刊）。
- 一九五九年 広島大学文学部講師。
- 一九六〇年 三―四月、第二次広島原爆文学論争。「若い広島人会」発足。⁽⁵⁹⁾『六〇+α』創刊。⁽⁶⁰⁾
- 一九六二年 広島大学文学部助教。
- 一九六九年 八月、広島大学に機動隊導入。パンフ「われわれにとつて真の問題は何なのか」発行。
- 一九七〇年 十一月、ヒロシマ会議「現代における平和への条件」発言と総括。⁽⁶¹⁾
- 一九七一年 広島女子学院大学原爆講座にて講演。
- 一九七七年 広島大学平和科学研究所センター主任。
- 一九八〇年 同上兼任研究員。広島大学文学部教授。
- 一九八三年 日本平和学会にて報告。⁽⁶²⁾ 関連内容を総合科学部総合科目「戦争と平和のための総合的考察」で講義。七月、アジア文学者ヒロシマ会議に司会として参加。
- 一九八七年 広島大学文学部退職。広島大学名誉教授。広島修道大学人文学部教授。
- 一九九六年 同上退職。NHK広島「二一世紀のヒロシマへ――平和行政を見つめる」（八月六日）に登壇。
- 二〇〇三年 逝去。

以上はおおよそ『松元寛先生退官記念 英米文学語学研究』（英宝社、

一九八七年）四八〇頁の「松元寛先生略年譜」などにより作成した。⁽⁶³⁾特に、一九九六年部分については岩崎文人編『広島県現代文学事典』、また幼少から青少年期は松元寛（一九七三）を参照した。

注

- 1 年譜を本稿末尾に載せたので参照された。
- 2 創刊の経緯と当時の広島文壇の状況について、この「歯車私記」にや詳しい説明がある。『歯車』について岩崎（二〇一〇）は、「少数の学究的、紀要的な文章でハイ・レベルの位相は保ちながらもどこか独自の趣きに甘んじる気配」を漂わせ、「拡散・離散の論理に支配されることを容認」して、グループの活力と持続力を損ねるに任せつつ、「狷介孤獨な保守主義者のように自尊・孤立の相貌を呈する」と書いている（四八七・八頁）。松元は『歯車』八号（一九五九年）の「編集後記」に「(M)名で、「小じんまりとまとまって、しかもすまじこんで少々お高くとまっているというのが、一般の歯車評である」と書いている。松元の広大紛争小説が連載されているのと同時期に、大野俊三も学生運動を主題として、『歯車』（二六一―二五号）に「落葉樹」を連載している。
- 3 号数はすべて雑誌『歯車』のものである。
- 4 「付記」として、「同じような事件」が広島大学で起こったが、「細部のシチュエーション」と「登場人物」はすべて架空であると記されている（三二頁）。
- 5 「付記」に、「広島大学において、昨年これと似た事件が起つた。しかし、シチュエーションを借りただけで、人物等はすべてフィクションで

ある」とある(九五頁)。それ以降は、③に類似記述がない以外、④以降すべてに「フィクション」であるとの断り書きがある。

6 本作は一九七二年三月号の『文學界』に転載された(岩崎一九七三・一五九)。

7 同号には「高橋和巴覚え書」も掲載。

8 「冬城」は「ふゆき」と読んだと、松元と親交のあった溪水社社長木村氏に教えていただいた。松元は溪水社から『象牙とチョーク』(一九七八年)、『シエイクスピア』(一九七九年)を出版している。「冬城浩」のペンネームは、松元「空洞を脱すべく進む広島大学統合移転計画のかたの空洞」(一九七五)でも使われている。この文章を『象牙とチョーク』に所収するにあたり、松元はこのペンネームが自分であることを記している(初出一覧のページ参照)。

9 その間の一九七三年冬から七四年冬にかけて、松元は漱石論一、シエイクスピア論二本を『歯車』に投稿している。

10 補導委員は、一九六八年三月一二日、補導体制検討委員会が評議会で決定され、発足し置かれたものである(『通史』四〇〇頁)。「補導」という語は、一九四九年の広大設置に伴い、「厚生補導の組織」として「補導部」が置かれたことに遡る。一九五八年に「補導部」は「学生部」に改称した(『部局史』一〇八九頁)。

11 この表現は広島大学による大学史におけるものであることに注意されたい(『広島大学二十五史 通史』三九六頁)。

12 晩年に松元は、英語教師を続け、「その間何度か小説を書きかけながら、遂に小説一本に踏み着くことはできませんでしたが……」と心中を吐露している(一九九九年a・七)。

13 一九六七年一〇月八日、羽田事件、広大生八名逮捕、四名が起訴

(『広島大学二十五史 通史』三九二頁)。以降、『通史』『部局史』と省略する。

14 「第二教授会」について、松元は②で、「助教授、講師を含めた」教授会としている。⑥には、「人事や予算を決定する教授だけで構成された第一教授会と、学生補導や教務関係の問題を扱う、助教授も加わった第二教授会(五六頁)、⑧では「助手を含めた第三教授会(二六頁)」と説明されている。なお二〇一九年においては、広島大学文学部・文学研究科の「教授会」は教授により構成され、「教員会」が教授・准教授・講師・助教により構成されていた。五〇年前の制度が大まかに残っていると見える。一九九〇年代半ば、私は北海道大学教育学部の教授会に、教育学部自治会準備会メンバーとして(つまり学部生身分で)オブザーバー参加していたことがある。「教授会」自治を考える際の参考になろう。

15 『部局史』の「教養部」には、この日機動隊が導入されたことの記述がなぜか存在しない。

16 岩崎は本テーマ「広島文学」を、『梶葉』(一)一九九三年II巻、(二)一九九六年IV巻、(三)一九九七年V巻、(四)一九九八年VI巻、(五)一九九九年VII巻)に連載した。なおこの連載について、溪水社社長木村逸司氏と広島大学川口隆行氏にご教示いただいた。岩崎(一九三二年生まれ)は、『安藝文学』、『梶葉』の編集者である。

17 「造反教師」の語は⑤に松元を思わせる須田を描写する中で登場し(二二四頁)、松元自身も後年、自分に対して使用している(松元一九九六年b)。

18 上に見たように、ほぼ同時期(同月)に、松元は本連作の最初の小

説①「まだ来ない明日」の執筆を終えている。

19 一九六九年二月二八日に全共闘は大学本部を封鎖・占拠し、その後封鎖は教養部、教育学部へと発展し、キャンパスの各門にもバリケードが構築された。四月一〇日、文学部は文学部全共闘により封鎖され、医学部学生も四月一日に無期限ストに入り、四月二一日は政経学部が政経学部闘争委員会により封鎖された。五月二五日には理学部が理学部共闘委員会により封鎖され、これにより東千田キャンパスは、図書館と学生会館を除き、すべて全共闘学生により封鎖された（『部局史』一九七七・一一〇六・七）。

20 広島大学では一九六八年二月に「大学を考える研究者の会」が成立していた（『通史』四一二頁）が、この組織と松元の関係は不明である。当会は、一〇月以来有志二〇数名が準備会を持ち、紛争を「大学内の前近代的な体質」がもたらす矛盾が顕在化したものと捉えていた（同上）。松元の残した文章や小説には、当会に言及したものは管見の限り見当たらない。なお⑤には、須田助教教授が「三年前の『紛争』中にできた大学に対して批判的な教官のグループの主要メンバーとして、その機関誌に、その時その時の問題に処する大学側の態度に対して、教授会であるのと同じ姿勢で批判する文章を書いていた」とある（一二七頁）。

21 浅川淑彦学生部長は一九六三年—一九六九年一〇月三一日が任期で、その後文部視学官として文部省に転任した（今井二〇〇九・七八）。広大紛争沈静化の実績を買われての栄転と見てよいだろう。その後学生部長は「教官併任」となり、今井日出夫（教養部教授）が一九七三年まで務めた（『部局史』一〇九〇・一頁）。

22 同号には、教員の丸山益輝「われわれは今何をなすべきか——松元

氏のパンフに寄せて」（七・九頁）も掲載されている。

23 浅川は、文部省大学学術局学生課が出していた雑誌『厚生補導』に度々投稿している。「学生運動という否定運動」（一九六八）、「補導体制と大学の姿勢（鼎談）」、「真贋（大学問題随想一）」、「空談（大学問題随想二）」（以上一九六九）、「学生運動をふりかえる」（一九七四）『厚生補導』それぞれ二〇、三五、三七、三八、九九・一〇〇号。「実存と仮象」と基本的なトーンは変わらない。

24 「昨年羽田事件」とは、一九六七年一〇—十一月に佐藤首相のベトナム・米国防問を阻止すべく機動隊との衝突が起こり、死傷者を出した事件。

25 クリティカルな危機がすなわち好機でもあると捉える松元がいる。この見方は、ベンヤミンとベンヤミンを読み直す人文諸学の先行研究に影響を受けている（中村二〇二〇を参照）。一方、本草稿を発表した研究会の場で植松青児氏により、この辺りの松元さらには全国の全共闘運動に、ロマン主義の傾向が感じられるとの警戒感が寄せられた。敗戦と眼前の団交の解放感の重ね合わせとそれを書くことの高揚については、ロマン主義的傾向も確かに感じられなくもないが、ロマン主義をいかに定義するかという問題の所在と共に、本草稿で取り上げた松元の理性的・知性的な種々の営為を総体として見れば、この辺りの松元をロマン主義としてのみ見なすこともやや乱暴だろう。全共闘に批判された東大法学部の丸山真男（教授）は、C・シュミットに基づき全共闘とロマン主義の近似性を口にしていたようだ（清水二〇一九・二二八、二八五）。この問題に対し清水は、一部を認めつつも反論しているが、全国の大学と広大を腑分けしつつ全共闘とロマン主義の関係性をいかに捉えるかについては、本草稿の主題を越えるため別稿を期したい。

26 ドーム保存工事の終了後の一九六九年八月に、松元は「ドームは死にきつて、乾燥し、もう腐敗することさえもできなくなっているように見える」と記している(松元一九七三(一九六九)・七二)。

27 同様の決議がなされたことが、広島大学文学部『昭和四十四年四月起 第二教授会議事録』の六月二十五日議事録に記されている。

28 広島大学文学部『昭和四十四年四月起 第二教授会議事録』の六月三〇日議事録に、「健康上の理由で辞意表明(六月二十五日第二教授会)のあつた小倉、松元学生委員の改選」とある。小説内容からすれば、この「健康上の理由」という文言も欺瞞となろう。

29 ここで詳細に検討はできないが、折原浩『大学の頹廢の淵にて』(一九六九)で描かれる東大の頹廢と、松元の言う「廢墟」は共鳴している。折原は「頹廢」の中身について、教授会や評議会のはぐらかしや自らの誤りを認めないこと、教育者と学生の関係が権力者と被抑圧者の関係に代わられていること、ある教授の知的・人間的頹廢という点を挙げている。

30 加藤は松元の追悼文を書いている(加藤二〇一六(二〇〇四))。第六節で論じるように、それがジエンダーにおける立場性の敏感さにつながるかは、別の問題である。

32 折原は一九三五年生まれで、一九六六―八六年、東大教養学部助教。『朝日ジャーナル』一九六九年六月一日号特集「造反教師」は、編集部(酒井武史)「職と学問を『賭けた』人々」、最首悟(東大教養学部助手)「自己否定のあとに来るもの」、中岡哲郎(神戸外大講師)「知識人の組織」、新島淳良(早大助教)「五・二九に参加して」という構成である。なおこの特集は、一九六九年五月二十九日東京で、東大助手共闘・日大教員共闘共催による「大学を告発する」

全国大学教員報告集会を受けてのものである。集会では、全国四六大学、百数十人の教師が集まり、徹夜の討論が行われた。

33 「C派」は中核派を指すと考えられる。

34 なおこの連載のタイトルは、「はぐれ英語教師——戦中派」である。第四節「敗戦の廢墟を想起する松元と自由の空間」にも関連する使用法である。

35 広大全共闘で「自己否定」が言われていたのかについては、別途検証しなければならぬ課題である。なお松元は、高橋和巴の死に応答しようとする文章において、高橋の『わが解体』と自己否定・解体に触れている(第八節にて触れる)。折原浩(一九八一)は、『大学解体論』の内容と意味、「自己否定」の論理について、東大の状況に即してまとめている(三四・四二頁)。

36 「親交があつた」というのは、溪水社(広島市中区)社長木村氏による(二〇二〇年一月一日インタビュー)。木村氏は広大に一九六一年入学。『歯車』一五号(一九六六年)には、松元の『日本のハムレット』出版記念会が開かれ、参加者に平岡の名が見える(「同人会記録」九〇頁)。

37 京城帝国大学予科は理科乙類(医学コース)である。一九四五年九月末に広島市に引き揚げ、旧制広島高校を卒業後、早稲田大学第一文学部に進学しドイツ語を専攻、一九五二年中国新聞社入社。一九九一年から一九九九年まで広島市長を二期務めた。

38 以下を参照した。中国新聞「生きて 前広島市長 平岡敬さん」連載、二「朝鮮」、三「八・一五」、四「引き揚げ」、五「東京」、九「在韓被爆者取材」(二〇〇九年九月三〇日から一〇月一四日)。

39 なお雑誌『歯車』にも、広島における朝鮮人徴用工を描いた、藤本

仁「一九四五年冬」「一九四五年冬(二)』『齒車』二七、二八号(一九七五、七六年)が掲載されている。「アジア」との加害/被害の輻輳性を広島原爆との関連で考える点については、平岡以外にも栗原貞子をはじめ多くが論じられねばならないが、紙幅の都合によりここでは展開できない。

40 松元は東大卒業後、広島に戻る前まで東京創元社で働いている。

41 ⑥においては、大学における「師弟愛」がとつづくに雲散霧消してしまつたと記される(四五頁)。

42 この背後に天皇制家族―国家イデオロギーがあるが(中村二〇一九)、松元はそれを対象化し、明確に思考の対象としては取り組んでいないように見受けられる。本小説群における松元には、「対等な存在としての学生」と、温情主義的な学生観が混ざり合つていたように思われる。

43 補足として、①「まだ来ない明日」における石村志津子の女性像を簡単に分析しておきたい。自治会連合で活躍する釘本久志と付き合う石村は、運動に忙しい釘本に想いを募らせ、「なんの話をしようと思つてたのかしら」(二六頁)と、自身の行為を理性的に把握しきれずに釘本の住む「K寮」の傍まで行つてしまふ、感性的な存在として造形されている。石村が釘本に惹かれたのも、釘本に学生運動の意義を熱く説明され、自分も目覚めていく(一七、二〇頁)という、紋切り型のイメージである。①の中で石村は、釘本を想い身の安全を心配し、「待つ姿勢」(二二頁)を持たされる古風な女性像である。

44 「匠気」とは、好評を得ようとする気持ちである。芸術家などが、自分の作品の出来栄えを見せびらかそうとする気どりを言う。

45 こうした「共犯性」について、G・C・スピヴァクのC・P・ボード

レールの読みに示唆を受けた(二〇〇三:二二七)。

46 松元は結婚し息子を持ち、妻を「家内」と呼んでいる(松元一九七三:四九、五二、六一)。

47 『武蔵野夫人』(一九五〇年)は『俘虜記』、『野火』と同時期の作品である。復員兵である『野火』の「私」(田村一等兵)と、同じく復員兵である『武蔵野夫人』の勉は、ともに社会適応に困難を感じる「一種の怪物」的な存在である点で、重なっている。一九五三年に大岡自身が復員兵として語っている「何となく周囲になじめない『乖離感』は、そこにある。この乖離=解離については、傷痕軍人として復員した私の祖父(一九一四年生まれ)の周囲や社会との解離的なあり方について言及したものに、中村(二〇一九)がある。

48 例えば②「バラダイス・ロースト」での、公開教授会を開くか否かの議論の論理と応酬は、内部の視点を持つていたからこそその描写と言える。また②では、パンフレットを学内に公開することについて、それを止めるようパワーハラスメントを受ける助教授の姿も描かれた。

49 松元は「萌」の字について、意図して別の字体を使用する。

50 同僚だった好村富士彦(一九三一―二〇〇二、ドイツ文学・哲学者)への追悼文は、松元の最晩年に書かれたものだが、そこでは、「私は政治的党派にとらわれることが嫌いで、思想的にも特定の思想家に心酔(?)することもなく、漠然と文学一般を拠り所としているような気分の人間」と書いている。これは、「政治的な或る党派の立場」をとり、「現代の先端的な思想家を踏まえて」いた好村と自分を対比してのことである。その一方で、松元は好村に「信頼感」を持ち、「広島に文学館を」の運動では、共に市長に陳情に行っている(松元二〇〇三)。

51 白黒ハッキリつけず物事を断定しないことから、松元が学生に「ハム

レット教授」と呼ばれていたことを語るのは、広大文学部時代松元に教えを受けた深水社社長木村氏（広大には一九六一年入学）である。

一方、文学部にはドイツ文学を教えていた「滝沢（寿一）先生」がいて、警察導入支持派だった。栗原貞子、丸木位里さんらとは表現の仕方が違い、「松元先生は思想化する方向性」を持つていたと語られた（二〇〇一年一月一五日インタビュー）。

52 栗原については、高雄きくえ（二〇一六）、松本慈恵（二〇一九）をさしあたり挙げておきたい。

53 一九七四年に日本・アラブ文化連帯会議のアラブ側一行が来広した際、栗原は松元に頼んで通訳してもらったと書いているから、二人の關係性は保たれていたと見てよい（栗原一九七五・二五四・五）。

54 「平」の字体は、松元は意図して「平」の点が「フ」の形ではなく「ハ」の形のものを使っている（「華」の下の部分）。

55 この文章は「特集日本人のアメリカ体験」の一編として投稿されたもので、本特集は掲載順に、室謙二「パールハーバーからヒロシマまで」、松元、加藤典洋「チャールズ・ケイデイスの思想——植民地日本の可能性」、和田春樹「握った手をはなさずに——日米安保体制を考える」、吉岡忍「脱走兵のアメリカ」である。

56 一九二四年生まれには安部公房、邱永漢、吉本隆明があり、山代巴は一九一二年、栗原貞子は一九一三年、丸山真男が一九一四年生まれである。

57 東京帝国大学を東京大学と改称（帝国大学令等を改正）したのは一九四七年である（東京大学ホームページ「沿革」参照）。

58 一九五二年、広島高等師範学校が廃止され、広島大学教育学部附属東千田中学校・同高等学校と改称。その後、「広島大学教育学部附

属中学校・同高等学校」（一九五五年）、「広島大学附属中学校・高等学校」（一九七八年）と改称し現在に至る。校地は一九六一年に東千田から皆実町に移転（同校ホームページ）。

59 『中国新聞』一九六〇年三月一九、二一日に栗原貞子投稿、四月一日松元「不毛でない文学のために」。

60 「六〇年安保の政治状況と地方文化状況の緊張関係」から生まれ、研究集会を開き機関紙『若い広島』を刊行した（二号まで）。一九六〇年八月七日には、大江健三郎、開高健、堀田善衛らを招いて夏季集会を行い、松元は「地方文化の問題」を報告した（岩崎一九七三・二二三・四）。既存の広島文学会は、若い広島島の会の登場により「完全に敗退した」という（岩崎二〇〇〇・四七九）。

61 二号まで刊行（岩崎一九七三・二二四・五）。

62 「原爆被災をめぐる諸問題と市民の連帯」『世界』三〇六（一九七一年五月）・一九八・二〇四。『ヒロシマという思想』所収。

63 「八・六、広島の意味するもの」『ヒロシマという思想』所収。

64 「ヒロシマとナガサキ——その意味を考える視角」『平和研究』九（一九八四年）。『ヒロシマという思想』所収。

65 本書には、伊藤詔子・稲田勝彦・中村裕英・要田圭治・樋口昌幸（広島大学総合科学部）、田中久男・道木一弘・湯浅信之、GEH Hugga（広島大学文学部）らが寄稿している。「まえがき」を河井迪男が記している。